

針葉樹会報

第 113 号
2008 年 12 月



目次

旧制最後の山岳部時代	中村 正司	2
カリフォルニア州の山	塩川 清彦	5
加地さんの寄稿にふれて	市川 陽一	7
平ヶ岳を登りました	遠藤 晶土	8
山行記録(乾徳山・大峯山奥駈)		
リングに立つ	竹中 彰	9
アジア往復旅行1年2カ月	安島 孝知	15
バン格拉デシュ編	田形 祐樹	18
カクネ里単独行	山田 秀明	21
針葉樹総会報告		24
山岳会ホームページ開設のお知らせ		27
新入部員歓迎懇親山行(高尾山)		27
茅ヶ岳懇親山行		28
北岳山行報告		31
三月会通信		32
編集後記		36
表紙写真「雨飾山フトンピシスラブ」撮影・山田秀明		

発行日 2008年12月8日
発行者 針葉樹会
印刷所 ヤマノ印刷(株)

針葉樹会報 第113号

編集人 小島 和人
〒241-0817
横浜市旭区今宿町 2-60-1
会報幹事 / 小島和人、井草長雄
川名真理

語りつぐ昔

旧制最後の山岳部時代（昭和22～28年）

中村 正司（昭和28年卒）

一 山岳部の門を叩く

昭和22年、敗戦の廃墟の中で、軍制下の産業大学から元の東京商大に名称が復帰した年、私は旧制の中学から商大予科に入学し、渋谷、鹿侯達と一緒に山岳の何たるかも知らずに入部した。新人歓迎会には学部諸先輩も国立から参加して、小平で催されたがその折の印象は今もって強烈なものである。

学年の最高年は石井さんや大島、伊藤、田中、中村（謙治）さん達だったと思う。この人達の話題は小谷部岳人を語り合う高度なアルピニストの世界にあり、また戦前に充分な教養と体験を持つ大人の風格に満ちていた。

片や新人の我々とは云えば、戦時中は疎開させられたり、学徒動員で工場勤務したりで、終戦で学舎に戻り、初めて近郊の山野に青春を知ったワラジ履きの山男達である。それでも私などは中学（後の新宿高校）で戦後山岳

部を創立、草分け気分の余勢をかつての入部であった。その彼私の格差に打ちのめされ乍ら、似たような近間の先輩部員と「スキ焼き」に喰いついた想い出がある。

しかしその後合宿などで先輩達と打ち解ける程に、スキーでは大島氏のスラロームに魅せられる一方、転げまわる諸先輩へ次第に親しく解け込む楽しさはまた格別なものであった。

しかし岳人としての厳しい姿勢は、それから六年間私達の脳裏に植えつけられ、顧みるに貴重な最初の一年であった。

二 結束と反省の時代

（一） 谷川マチガ沢遭難

前述の岳人達が社会に飛び立つた後、次年度以降の先輩達が少数であり、急に寂しくなる。笠原、秋元時代の後、佐藤、望月時代には、五月の谷川マチガ沢合宿で雪渓の登行中に濃霧の山上から無数の雪氷ブロックが落下しての山中氏遭難事件に遭遇する。しばらくは反省を込めて、戸惑いと内向きの時代になった。

しかし反面、戦後の共通した環境に生きた昭和25～28年卒の部員は兄弟のような親しみと結束を深めるようになり、山岳部の体質強化が共通の認識となっていく。（注）詳細は

「針葉樹」第11号・昭和30年12月刊「昭和21～27」参照

（二） 針葉樹会OBからの募金活動

貧しい部員が器具を自前で揃えることが不可能な事情の中で、近いOBを職場に訪れ相談を重ねていったところ、部の体質強化のためには器具の最低限は整備せねばならないことが認識され、先輩達に寄附を仰ごうということになる。家庭訪問すべき先、職場訪問でもよい先輩等細かくアドバイスをもらい、また器具だけでなく廃居に近い部室小舎を補修すべきことも賛同を得、部員達の本格的行動が昭和25年の夏を中心に26年にかけて実施された。幸いこの頃、横山、南、海老沢諸氏の入部も加わり、また昭和23年には高橋、西村竹脇、五十嵐、渡辺、伊藤、駒見、宮川など新入部員が加わって空気も活発に満ちて来たお蔭で、成果が現れ、器具も整備され、部室も補修、中二階の居住性も復元、横山、鹿侯両氏が自炊生活を始め、メンバーの立ち寄りも多くなり、さらには可^べさんやご家族とも親しく往訪するようになり、明るい山岳部が芽生え始め、その後の夏・冬合宿が軌道に乗るようになったことは感謝に耐えない。そして一方諸先輩への訪問は当時の部生活なども見聞を拡げ、日銀の大塚先輩宅では夜遅くまで小谷部時代を学ぶところとなり、想い出は尽



1952年、改修なった国立部室にて夏山合宿打ち合わせ会。
 最上段左より、竹脇、南昌宏、渡辺幸信、中村賛治、中村正司、伊藤助成、西村勝、(中列)須山修平、甘利仁朗、粟屋、勝田有恒、石原脩、吉田義則、高崎治郎、太田可夫教授、佐藤博、中村幸正、佐藤恭、春日井実、(前列)福田、奥野巖根、不明、鈴木克夫、白川隆夫。



1952年、夏合宿の涸沢にて。
 最前列左から、佐藤恭、渡辺幸信、中村幸正、南昌宏、高崎治郎、石原脩、佐藤博、(2列目)松尾寛二、中村正司、鹿俣謙一、春日井実、渋谷一郎、(3列目)西村勝、粟屋、棚沢、奥野巖根、海老沢齋、勝田有恒、須山修平、甘利仁朗、(最後列)竹脇、白川隆夫、伊藤助成、不明。
 (写真=南昌宏提供、氏名は石原さんに調べていただきました)

きない。(注) 針葉樹会報復刊20号参照。

(三) 失敗と体験の中で

時代の谷間にあえぎながらも夏は涸沢や劔沢での合宿ならびに縦走、また冬合宿は乗鞍位ヶ原や八方尾根など、着々無事進行していったが、その中で数多くの特に集団登山の基本的なことなど多くの教訓を学んだ。

「冬の遠見尾根合宿と五竜岳」

この合宿で五竜岳登頂の目標は最高年の横山、小泉両氏によって果たされたが、その前に二つのアクシデントを体験する。

(イ) 雪中登山で取り残された二人のピバーク

大町駅から深い雪に足をとられながら遠見小舎に向けて登り出し、本隊は一気に前進して目的を果たしたが、最後尾の海老沢が疲労の極に達し、彼に付き添った私と二人が取り残された。夜の闇の訪れに雪を掘り固めピバークしたが、遂に本隊とは連絡もとれないまま夜明けを迎えた。互いに顔を叩き合い乍ら激励し合って一夜を明かしたが、相互に通信する術もない時代に「全体と個」について深く考えさせられた初日でもあった。

(ロ) 器具管理と事前点検の欠落

その翌日、五竜岳攻撃の準備に前進基地キャンプを設営する役目を私を含め三人が拝命したが、それらが完了していざ夕食の準備

になって、ラジウスの「空調ネジ」の欠落を知った。手製で竹ネジを作り差し込んだが、加熱中手を離れた瞬間に中のオイルが噴き出しテント内ボヤを起したが、幸いテントの位置は風雪に耐える場所に設営したこともあり、補修後翌朝に三人は本隊の待つ小舎に帰ることが出来た。この事故の原因はラジウスを前に使った者の無責任さと、合宿前の点検不備が重なったことである。OBには頭の上がない管理不備が露呈したことに、ひどく自戒した合宿でもあった。

三 最高学年の任務とは

(一) 部の橋渡しの第一歩「新人募集」

昭和27年、旧制六年目、渋谷、南、鹿俣、海老沢、荒砥、小生達が最高年を迎えるが、昭和26年に石原、白川、須山、福田等岳人の見識をもつ後輩の大部に励まされ、改めて小平でのオリエンテーションに力点を置いたが、幸い吉田、奥野、高崎(南竹)、松尾、石和田、佐藤、宮川、鈴木、瀬田、尾身、中村(幸)など次世代有力メンバーの加入を見る。顧みれば小平講堂の壇上で部員が運んでくれた飯盒の冷水をゴクゴク飲んで見せたが、その時の美味は今もって忘れられない。

(二) 有終の美は飾れたか

夏合宿の打ち合わせ会は、新人を加えて国

立の部室が満杯になる程の盛況を見せたが、山行は「ひとつの生物」の様にいくら前例を学んでも次々と新しいアクシデントが生まれるものだ。本涸沢合宿で先発隊を数人事前に送ったが、そのテントに落石事故が発生する。「福田君の大腿骨折」の報に我々本隊は、救護をかねての出発であった。幸い先発隊員達の不眠の努力で応急の手配も済まし、涸沢から無事下山に成功したが、福田君自身の強靱な人柄のお蔭もあって、その後の本合宿ならびに縦走が無事完遂された(08年針葉樹会新年会にその後家業を継いだ同君が姿を見せ、半世紀ぶりの再会に感動の握手となったことを付記する)。

顧みるに人数だけは23人という大所帯の合宿になったが、盛況はともかく内容は後世に誇る記録など残していない。だが敗戦後という特異な時代背景の中で、未経験者が多く、山岳部が存続されることに世代の役割として甘んじなければならなかったと思っている。

その後一橋大学山岳部の活動ならびに針葉樹会の盛況の中で、OB活動をリードする人達を輩出、さらに社会的に地道に貢献した人達も出ていることを知り、とても嬉しく思う。そしてあの時代の役割をはたせた事に感謝している。

カルフォルニア州の山

塩川 清彦（昭33年卒）

カルフォルニア州の概観

私の住んでいるロスアンジェルズ地区はカルフォルニア州の南部にあり、西側は太平洋、東側は車で1〜2時間で、サンタモニカ、サンガブリエル、サンパナディーノなどの山塊に着きます。これらの山塊は、3000mを超えて山から、2000m、1000m級の山と森林、深い渓谷を持ったハイキングに格好な地域となっています（此方では岩登り以外の登山をハイキングと言っています）。お蔭で私は、大変便利に登っています。

カルフォルニア州は、地形的には南北に細長い州で、全体の面積は日本の1・1倍あり、すっぱり日本全体が入ってしまう大きさです。州の東側に南北に連なるシエラネバダ山脈が在ります。この山脈はヨセミテ、キングス・キャニオン、セコイヤの3大国立公園を擁す、ロッキー山脈と並ぶ大山脈です。そこ

には、*Sierra Nevada* アラスカを除くアメリカ)の最高峰、マウント・ホイットニー(4348m)をはじめ、いくつかの4000m級のピークが聳えています。私の家からマウント・ホイットニーの登山口までは、北へ車で4時間ほどかかります。

シエラネバダ山脈の西側には、東西180

km、南北800kmのサンヨキーン・バレーが在ります。「バレー」というと谷を想像されませんが、実は大平原です。そのど真ん中にアクアダクトがあり、砂漠地帯を灌漑して一大農地となっています。シエラネバダは、冬の積雪により水量も豊富で、緑が多いのですが、ロス近郊の山塊は、一部の森林と渓谷を除いて、乾期(5月〜10月)は茶褐色の枯れ草です。山道はガレ場と禿山状態です。今では山の積雪だけでは水量が足りないので、コロラド・リヴァーより貰っています。

ロス近郊の登山の特色

ロス近郊の山の気候は、大体「夏」「冬」の二期です。冬は17、18度、23度ぐらいで暖かく、夏は27、28度、40度近くまで上がりますが、湿度が非常に低く大陸性気候のため、朝晩は大変涼しくなります。このためか、登山期間は、キャニオンの周りの地域と低山を

除き、10月〜6月あるいは、11月〜5月となっています(ガイドブックによる)。

この地域に限らず、アメリカでは山小屋というものは殆ど存在しません。ロス近郊の山は、アプローチが近いこともあり、かなりの山は日帰りが可能です。しかし、日帰りが無理なときはテントを持参し、バックパッキングとなります。

国立公園はもとより、ナショナル・フォレスト、リージョナル・パークの所要所にはレンジャー・ステーションがあります。したがって、登山道をはじめ、駐車場、キャンプ場と管理が行き届いています。

車の往來の殆どない登山口に車を置いていくと、帰りにはちゃんとステッカーが張られ、駐車料金が請求されます。駐車券はレンジャー・ステーションで購入できるので、1日券(\$5)と年間パス(\$30)があります。

国立公園をはじめとして、その他のパークも駐車料金だけで、入園料は一切取られません。ただし、高山になると入山許可が必要となります。特にマウント・ホイットニーは入山制限があり、週末などは抽選となります。

シニアに優しい制度

2000年春、上原君と一緒に私の車でア

メリカ大陸を横断したとき、ある国立公園でシニア・パスを無料で貰いました。今でも大変便利に活用しています。このパスは、全ての国立公園に入場できるライフタイム駐車券で、シニアが1人同乗していればOKです。私は自分で運転しない時でも必ずこの券を持参します。だから、若い人たちに大いに喜ばれていています。

さらにヨセミテのキャンプサイトでも効果があります。アメリカでは老人は優しく扱われ、こういう優遇措置が多く、低料金で遊ばせてもらえます。

ところが、バックパッキングの場合の問題は、水です。野生小動物が多いので、水場はバクテリアで汚染されており、生水は危険とされ飲料水には使えません。そこで濾過装置が必需品となります。さもないとペットボトルを何本も背負って歩かなくてはなりません。

危険な動・植物

渓谷などをハイキング中に気をつけなければならぬものに、ポイズンオークがあります。これは漆のように接触すると痒みと痛みで皮膚が腫んで、回復までには結構時間がかかります。一度かぶれると癖になり、かぶれ易くなるので厄介です。私も何回かやられて

医者にかかり注射を打ったこともあります。なお、東海岸ではポイズン・アイビーが同じ様にかぶれます。

山ではウサギ・リス・鹿をはじめとして色々な動物に出会います。危険な動物としてはまずコヨーテ、ボブキャット、ガラガラヘビがいます。

大人は問題ありませんが、犬猫などのペットや小さい子供は気をつけなければいけません。コヨーテに限らず動物は、自分より大きいものは襲ってこないで、子供は肩車でもして高く上げれば問題ありません。最も危険なのは、マウンテンライオン(身長150cm位の動物)です。普通は大きな成人などは襲われることは少ないようですが……。

3年ほど前の正月、私の家から車で5分ほどのリージョナルパーク内で自転車に乗った男性が食い殺されました。その直後に同じく自転車の女性2人組が襲われ、1人が顔を噛み付かれ重傷を負いました。その女性は我が家の3軒ほど先の若妻でした。今は3回の整形手術も終わり、元通り綺麗になってマウンテンバイクを楽しんでいます。

男性を食い殺したライオンを射殺し胃袋を調べたところ、DNA鑑定で同じ男性とわかりました。ライオンは驚いて襲ったのではなく、食料として襲ったので、地元では話題を

呼びました。歩行者は大きく見えるが、マウンテンバイクの場合、かがんでいるので小さく見えるため危険と言われています。

山火事について付言

このパーク内の山は昨年10月に山火事で丸焼けとなりました。その脇に住む友人などは、避難命令が出て眠れぬ夜を過ごしたそうです。たまたまその山は私が週に1回は歩いていたグレンデ的存在でした。火事の2日ほど前にも午前中に出かけ、鹿の家族5頭と出会いました。和やかな雰囲気だったので、今はどうしているかと心配しています。

山火事のとパークは閉鎖され、遠くからは真つ黒な姿が見えていました。幸い、この秋には1年ぶりにオープンすることが決定したそうです。一安心して喜んでいるところです。

もともと山火事によって古い樹が倒れ、灰は肥料となり、新しい樹が生え替わるといふ生態系の中にあるので、山火事の殆どは自然に任せ放っておくのだそうです。問題は、近年、人間の方がだんだん山に近づき過ぎていることです。

今でも消防の基本方針は、人間の生命財産に危険が及ぶときは消火活動をするものの、それ以外は見守るだけのようです。ただ、昨

今の地球温暖化の影響で、この方針がどう変っていくのか……どう変えていかなければいけないのか……と考えています。

加地さんの寄稿にふれて

市川 陽一（昭34年卒）

112号で一年先輩の加地幸雄さんのご母堂の俳句についての寄稿がありました。

その中で、「母方の祖父」とあるのは明治時代に「三風」と謳われた三人の碩学の一人である姉崎潮風先生です。他の二方は高山樗牛と笹川臨風です。森鷗外、夏目漱石の時代です。潮風先生は宗教学者で英文の著作も多くものし、海外でも有名な方でした。したがって加地さんが言われておられる「私の母」は潮風先生のご息女に当たられます。潮風先生は俳諧の評論もされておられたと聞きます。母上もこの血を引いておられるわけで、またもちろんのことながら、加地さんの哲学者としての素養も祖父の潮風先生の血をそのまま受け継がれたものと考えております。

小生、卒業と同時に加地さんの父上が創業の会社に奉職し、お世話になり家族のお付き合いをさせて頂いておりましたので、本件一言述べさせて頂きました。なお、潮風先生は漱石とも親交があり、母上が保持されておられた潮風先生宛の漱石の面目躍如たる書簡を加地さんより見せて頂いたこともありました。

さて私事の山行きですが、小生、京都在ちようど三十年になり、比叡山の麓が住居で、裏に連なる「京都北山」には至極簡単に行けますので、在職中は休日、一年半前に退職して以降は頻繁に出かけています。一〇〇〇mに至らぬ山並みですが若狭湾にまで連なり、東西南北幅広く展開している山容は低山ながら極めて興味ある山です。小生、横浜出身で、六〇年以上前から丹沢には近しんでおりました。昨年退職と同時に表尾根、大倉尾根を四〇数年ぶりに歩きました。が、余りに木道等人の手が入っているのにガツカリしました。一方、京都北山には人の手が入っていない処も多くあり、低山ながら私はこの山が大好きです。それに地の利で思い立てばすぐに出かけられるのは魅力です。退職したら居を小田急沿線に移し、丹沢山塊をとの心積もりですが、今は諦め京都に居続ける予定です。

私は在職中はアメリカのコロラド州に頻繁

に出かけ、また長期に滞在していた関係で、退職後は現在に至るまでコロラドにはよく出ております。此処はロッキー山脈の中心部に当り、コロラド州のみで四二〇〇m以上の山が五四座、三〇〇〇m以上となると一〇〇〇座以上もあり、楽しめる山塊がふんだんにある処で（特に南部コロラドは日本でもあまり紹介されていない）、現在コロラドにスツカリ取り付かれています。

また加地さんが四〇年以上滞在されておられるコロラド州西隣のユタ州の塩湖（Salt Lake City）も素晴らしい山々に囲まれた処で、ここは中部ロッキー山脈にあたります。一方、コロラド州の山は南部ロッキー山脈です。ついでながら、さらに北は北部ロッキー山脈、さらにその北がカナディアン・ロッキー山脈で、いわゆる大陸分水嶺がそれらのど真ん中を南北に走っています。ロッキー山脈は斯様に四つの区域に分かれています。

加地さんは The University of Utah (Utah University) もありますが、The University of Utah の方が格が上で、加地さんは三〇年以上にわたり此処で教鞭をとり最優秀教授賞を一度受けられたと聞きます。日本人の誇りと思っております（奉職中に一〇〇〇回以上、中部ロッキー山脈の一部で地元ウォーサツチ Wasatch 山脈に登られており、昨年の九月

には加地さん選りすぐりの山並みを三箇所案内いただきました。頃は九月、真夏の山の喧騒はなく、また見事な紅葉と魅力的な山容に圧倒されました。今年の九月も他の山の数々を案内いただく予定でしたが、私が膝の筋肉を傷め完治していないので、残念ながら諦めざるを得ませんでした。

平ヶ岳を登りました

遠藤 晶土（昭37年卒）

平ヶ岳登頂は学生時代からの夢だった。名前がよい。高さ、険しさを誇示する山名が多い中で、「平ら」と自称して誘ってくれる山なのだ。しかも、起伏緩やかな広い山頂は池塘が点在し、高山植物咲き乱れる楽園だという。しかし、登山口は遠く、そこから山頂まで日帰りは困難とこれも案内書の全てが云つ。最近、伝の助小屋から専用のバスを利用すれば充分日帰り可能と聞いた。それを知っても、私が迎えるバスの時間までに往復できない時、バスで私を待つ見知らぬパーティーの無

言の白い目」が頭に浮かんで二の足を踏んでいた。今回、針葉樹会恒例の越後シリーズ2日目の平ヶ岳登山に参加を依頼した6月頃もその危惧は拭えなかった。しかし、この2ヶ月、障子ヶ岳、雌・雄阿寒岳、富士山等を旧知の針葉樹会の先輩、同期、後輩に前後を固めてもらって無事完登出来、「ワイ、憧れの平ヶ岳、楽しいな」と十分な自信と余裕を持って登れたのは幸せだった。

8月10日（日）

12時43分 浦佐着。夏休みピーク。新幹線の指定席、グリーン車入手出来ず。

13時40分 バス発。運転手が車内のアプ

退治。乗客は他に5名。大湯温泉等で下車。

14時40分 長い長い曲がりくねったシル

バラインのトンネルを越えて白光岩停留所。770円

14時50分 伝の助小屋着。温泉に浸かっ

て浴衣に着替えたところに前夜泊の荒沢岳登山組（佐雑さん、高橋さん、竹中さん、本間さん、川名さん）帰着。暑さと難所の続いた山を終え皆、消耗と達成感の顔。越後シリーズは史上名高い「姫の水汲み」始めハードなシリーズだ。

19時00分 一品ずつ解説つきの夕食に満足。就寝（高橋さん、竹中さん、車で帰京）。

20名ほどの団体と3組の若くはないが年寄りではないカップル。団体客の会話「俺は13年生まれだ。大正だぞ」と。「本当？」と首をかしげると佐雑さん「山崎さんだつて大正生まれだ」と。

8月11日（月）

03時00分 起床。04時00分バス発。団体

客は別のバス。我々は3組のカップルと。暗闇をゴトゴトではない、ガタン、ガタンと大きく揺れるが根性で眠る。バスを降り、沢を橋で渡り急登。佐雑さんに付いていく。本間さんと川名さんが後ろを固めてくれる。私は6年後こんなに元気で歩けるか？ 佐雑さんに聞かなくても、答えは決まっている。「努力次第」。

佐雑さんが「トップ行くか？」と川名さんに声をかける。川名さん「行ってみよつかな」と答えると水を得た魚、軽快な登り。勿論間隔があかないように休み休み気をつけて歩いてくれるのだが、この時以外はいつもシンガリで我々に気を使いながら歩いていく川名さんの、噂通りの健脚ぶりを、私は初めて目の当たりに出来て嬉しかった。

08時00分 視界が広がる。あれが山頂か。なだらかな板道を（誰が補修しているのだから？）山岳会？ 観光協会？ 自治体？



平ヶ岳山頂で。左から川名、本間、佐藤、遠藤

ゆっくり下って、ゆっくり登り返して山頂。

08時50分 三角点に4人でタッチ。この山も深田氏の「百名山」。同書に、「陸地測量部を除けば高頭氏が最初の登頂者」とある。新田次郎氏の『剣岳 点の記』に詳説されている。初登を巡る測量部と山岳会の競争は、深田氏は、触れていない。高頭氏の初登は1919年。その時、この三角点はあったのだろうか？ 深田氏は1962年に、2年前に完成した奥只見ダムを使って更に2日かけて登頂。

我々がこうして楽々登れるのは1968年、皇太子様ご一行が登るために整備したコースを利用してからの。しかし、皇太子もシブイ山を選んだものと感心する。

10時00分 川名さんの計算では、充分に13時発のバスに間に合うからと、「奇岩・玉子石」モノシリ見学。ハクサンフウロ、タテヤマリンドウ、キンコウカ、オヤマリンドウ……の花々、樹、野鳥、同行者の蘆薈をせつせとメモにとる。

平ヶ岳は何故、「たいら」なのか？ これは帰宅後コピペ（コピー&貼付け）。曰く「平ヶ岳は花崗岩で出来ている。花崗岩は鉱物結晶の粒状構造に特色のある岩体で、風化によって分解し砂粒に変化しやすい。そのため岩稜が丸みをおびる。花崗岩の山体は塊状で、山頂や山稜の幅が広く、小起伏面が保存されやすく、岩体内部の節理に支配された谷が発達しやすい」。お後がよろしいように。

11時50分 朝の出発点の沢に到着。バスまでは目と鼻の先。快晴。沢の水が恋しいというほどの汗もかかなかつたが、水の音に耳を傾けて静かなひと時。同じバスに乗る3組のカップルが次々と、ここで休みもせず追い抜いていく。我がパーティーが腰を上げた後も一人残ってこのひと時を楽しんでいると、バスの運転手が迎えに来た。何と、バス

は「13時に来る」のではなく、朝の場所に駐車したままで、「客が揃い次第出発する」由予定より30分以上早いのに、結局は、他のパーティーから「無言の白い目」で見られてしまった。

13時30分 伝の助小屋着。一風呂浴びて小屋の車に浦佐まで送ってもらおう。新幹線の車中、他の3人はビールを呑んで盛り上がり、呑めない私は熟睡して東京駅。解散。

山行記録

竹中 彰（昭39年卒）

乾徳山

5月11、12日（高原ヒュッテ・避難小屋泊）参加者「竹中彰（記録）、本間浩、門脇哲朗（昼から会会員）、高橋康夫（同）」計4名

かねてから乾徳山（2031m）の避難小屋宿泊を希望していた本間さんの誘いに乗って、「昼から会」メンバーのうち正月の蛭が岳

直登に参加し、塔が岳・尊仏小屋で祝杯を挙げたアルコール大好き人間達が再び各種のアルコールを担いで山に向かった。

5月11日(曇り時々雨)

高尾発08時44分の電車で塩山に向かい、10時00分に駅前からタクシードで出発し、三富徳和のバス停から更に集落の間を抜け林道を上がって下車(860m)。いつもの様に食糧担当の本間さんから公物の分配を受けてパッキングし直してスタート。

しばらく林道を歩き、10時37分に登山道に入り、11時前に林道(廃道になっている?)とクロスする地点で少憩(1065m)。銀口水を横目に登り続けて、2ピッチ目の休憩地点(1255m)で下山して来た立川女子高山岳部パーティとすれ違ふ。

3ピッチ目は1445mで刻み、その上の錦晶水で水を補給していると筑波大WVの一団が下山して来た。女子高、大学とそれぞれ若者達のグループを山で見かけるのは気持良いもの。そこから明るく開けた白樺林の斜面一登りで、ルートを左に逸れ外壁が白く塗られた白亜の御殿高原ヒュッテに12時44分着(1570m)。小屋は4〜5畳位の土間と7〜8畳の板敷きがあり、4人泊るには十分過ぎる位の広さであった。

小屋には雨の中、頂上から帰還した新潟からの中年男女混成パーティが休憩し、土間に備え付けの薪ストーブに火を入れていた。間もなくそのパーティも出発し、我々だけの貸切状態となり、マット、シュラフを広げて場所を整え、持参のアルコールを並べて早目の酒盛りをスタートする。

ちなみに担ぎ上げたものは、日本酒(山形の大山一升瓶)、焼酎(甘露500ml)、ウイスキー(BALLANTINE17年750ml)、マオタイ(200ml)、ビール350ml缶各自1本。ついでに各自好みのぐい呑み1個。これを本間さん、高橋さん手製の赤身、白身の刺身をそれぞれ昆布締めしたもの、タタミイワシ、味醂干しなどを炙り、野菜サラダを摘みながら空ける。

その後夕食の準備にかかり、本間さんが用意した鰻茶漬けを美味しく頂いた。食後も酒宴は続き、21時過ぎに流れ解散式に沈没した者から寝に入ってしまった。久し振りの板の間にマットとシュラフで安眠とはいかなかったが、アルコールの助けを借りて何とか朝まで眠りに就いた。(総歩数3・1千歩)

5月12日(高曇り、後晴れ)

05時に起床し、アルファームのフカヒレ雑炊を作り、荷物を小屋にデポしてサブザック

で06時30分出発。門脇さんは入山前からの風邪の為に体調不良とのことで、引き返すこととなり残る3名で頂上を目指した。06時55分に台地状の上の月見岩(1755m)に出た。富士山、丹沢、奥秩父等の眺望をしばし楽しむ。あいにく高曇りの下で富士山はいま一つスッキリしないが、雲海の上に雪のタップリ残った姿を現していた。その後扇平を斜め左方向に登って僅かに雪の残る林の中の登山道を辿る。登るうちに岩混じりのルートとなり、クサリ場も出てくる。2000m直前で2ピッチ目の少憩とし、その後は本格的なクサリ、ハシゴが続き、最後の頂上直下は約10mの傾斜の急な左側に斜めにクラックが走る岩場となるが、ここにもガッツリと太いクサリが張られている。

先ず本間さんがこれに挑戦し、最初の5m位をクサリを握りつつクラックに足を捻じ込んでスタンスを固め、右側のフェース状の岩をフリクションで右斜めに走るクラックまでせり上がると、ほぼ核心部は終了で、その後は少々左斜めにホールド、スタンスのしつかりした岩場を登る。二番手で竹中が続くが、かなり腕力も必要になるので、三番手の高橋さんに声を掛け岩の基部を右に捲くルートを偵察してもらい、高橋さんはそちらに迂回する。岩場を乗り越えようと緩い草付きを辿って

直ぐに乾徳山(2031m)の頂上に達する(08時12~30分)。程なく高橋さんも合流し、記念写真を撮り、奥秩父の金峰や遙かに南アルプスの北岳、富士山等の景観を我々だけで独占しユツクリ楽しむ。

下山ルートは往路と異なり北側の黒金山方向に岩尾根を進み、5m位の下りのハシゴ、クサリ場を通過して10分程度で左手に林の中に降りて行く道が付けられていた。段差の大きな歩き難い傾斜の強い道を進み、2ピッチで09時51分に高原ヒュッテに到着した。2ピッチ目にはクサリ場や水場の存在もあった。

ゴミの整理、携帯電話でタクシーを予約し、小屋を10時10分にスタート。往路と同じ道を進み、駒止で休憩後、11時13分に林道の登山口到着。

その後10分程の林道歩きで11時28分に昨日の下車地点、更に5分弱でゲートに着くと予約のタクシーが待機していた。直ちに塩山駅に向かい、当初予定(13時45分発かいじ)よりもかなり早く、12時08分発の普通高尾行きに間に合い、高尾には13時12分に到着。車中でビール、残りのウイスキーで反省会を十分行ったことは言うまでもありません。また、今回は本間さんの勧誘文句の「夜 白く浮かぶ石楠花を 杯を傾けながら賞でる

」乾徳山山行」にもかかわらず石楠花は期待八スレでしたが、杯は傾けて一応計画完遂ではありました。(総歩数12千歩)

大峰山奥駈道三縦走

日時 6/1(日) 4(水)

参加者 竹中彰、村上泰介、本間浩、橋本啓之輔(大阪S高校OB、上原さん後輩、竹中・村上・門脇が指導を受けた恩人)、門脇哲朗(大阪S高校で竹中・村上同期、早大山岳部OB)

昨年(2009)の谷川岳縦走計画(天神平、平標、法師温泉)が諸般の事情から延期になり、本間さんから気心の知れている橋本さんの地元、関西の山に行くとのアイデアが出され、これに橋本さんが応えて大峰山奥駈道縦走計画(時間的制約から「ミニ」として山上ヶ岳、八経ヶ岳)を策定して頂いた。

さらに本間さんから「橋本さんに世話になった住高山岳部12期の揃い踏みで、広島から村上さんの参加も」との求めに応じて村上さんも途中から合流することになり、大変懐かしくも楽しい山旅を予感させるものとなり、後はひたすら入梅の遅れを祈っていた。

5/31(土) 曇り

門脇さん、竹中と食糧担当としてザックに入り切らない公物入り断熱バッグをぶら下げた本間さんが新横浜駅ホームに集合、のぞみ115で京都に向かった。京都から近鉄特急で下市口で下車すると、一足先に到着した橋本さんが出迎えてくれ、奈良交通バスで天川川合に出発した。15時過ぎに川合に着き、予約していた弥仙館の看板を見落として少しまごつく場面もあったが、まだ時間的に早いので、ザックを玄関先に預け、旅館の車で天河大弁財天社(竹生島、宮島と共に日本三大弁財天の一つ)にお参りした。

近くの南朝御所跡、来迎院の大銀杏にも廻って帰路は天ノ川に沿って旅館まで約30分の食前の歩きとなった。入浴後の食事は鹿刺し、猪ナベ、鮎の俵巻き、アマゴ、イタドリ、豆腐等地元素材を活かした料理の数々、吉野の地酒山桂が進む。翌日の登りを控えて程々で宴を切り上げて就寝。(総歩数7・8千歩)

6/1(日) 晴

07:00に食事を済ませ、予定より30分早くタクシーに乗車、洞川温泉經由大峰大橋に到着、結界門で写真撮影後08:20に歩き出す。スタートしばらくして多くの下山してくる

パーティーとすれ違うが、橋本さんから、大峯では「よお、お参り」と挨拶すると教示され、それに従って挨拶していくが、白装束の人間からは特に力強い挨拶が帰って来る。

一本松茶屋手前、尾根に出た所で少憩後、お助け水を通過、ピッチを刻んだ後に洞辻茶屋手前で吉野からのルートに合流、そのままだにすけ茶屋を過ぎたところで休憩。

ここで元気を付け、油こぼし、鐘掛岩等のクサリ場等を通過して、11:45に大峯山寺到着。この間、出会う人は当然のことながら男性のみであり、全体に静かに歩いており、久し振りに山で清々しい気持になる。近頃の、女性が圧倒的に数的優位を誇り、姦しく傍若無人に話す場面を多く見るにつけ、この様な山も少しはあつても良いのではと思つ。

平成2年6月の皇太子登山記念碑、堂内を見学してから山上が岳(1709m)のお花畑(笹原)で、遙かに弥山に至る明日からの奥駈道を眺めながら昼食(山本尚禎さん紹介になる本間さんの定番・色々のナッツ類が入ったロシアパン、スूप等)。

天候にも恵まれ、今日の泊場の笹篠宿まで先も見え、時間もタップリなのでユツタリ過ごす。「宿坊に戻ってビールを調達」する考えも飛び出し、全員荷物をデポして宿坊へ、500円のビールを飲みつつ宿坊の係と四方山

話。汗も引き、元気回復したところで山上を後にする。出だしは急な東側の斜面を下るが、右側稜線近くから何本もの樹が根こそぎ倒れ、道はガレていた。

しばらく進むと道は緩やかに疎林の中を進むようになり、投げ地蔵を過ぎ1ピッチ進んだ頃から石楠花が綺麗なピンクの花を咲かせている。少憩後10分ほど行くと、大きな岩を廻りこんだ所にテントサイトとしても気持良さそうな小笹宿に到着(1600m、14:38)。そこで、だにすけ茶屋で追越して行つた2人連れに会う。言葉を交わすと、先方は林野庁の役人で国有林の見回りに歩いているとのこと。「地図は持っているか」と聞かれ、些かムツとして昭文社、2万5千図を持参している旨答えると、奈良県庁作成の五万図(世界遺産 大峯奥駈道 熊野参詣道小辺路ルートマップ)を人数分譲ってくれたほか、色々とアドバイスを貰う。これには最近の調査事項も盛り込まれ、比較的正確とのこと。

その場にテント設営を考えたが、直ぐ傍の避難小屋がお勧めとのことだったので、覗くと4畳分位の土間と銀マットが敷かれた6畳位の板の間があり、他パーティーもおらず快適そうだったので小屋に入ることにする。水場は小屋の先10m程の所を小沢が流れており、よい水が得られた。

荷物整理が終わつた所でお待ち兼ねの宴会タイム。日本酒「白牡丹」、焼酎「甘露」を飲むうちに夕食のスキヤキを準備する。

本間さんの拘りで関西風と銘打ってワリシタを避け砂糖と醤油で味付け。残念ながら本間さん買出し時にはスキヤキ用の肉が店頭になかったとのことで、シャブシャブ用の薄い肉となった。天気予報では明日の昼頃から大阪は雨とのことだったので、朝の出発を予定の7時から1時間繰り上げることとし、8時過ぎには就寝。深夜外に出ると木の間に星が瞬いていた。(総歩数13・7千歩)

6/2(月) 曇り後雨

予定通り06:00に高曇りの中、小笹宿出発。1750m近くまで登り、1ピッチを刻む。その後3分程で阿弥陀が森分岐(境界門)を通過、さらに5分で脇の宿跡を通過。両側に咲き誇る石楠花の群落の中、比較的なだらかな樹林帯の道を辿り、1600m地点で2ピッチ目。経函石横を過ぎ、その後20分ほどで小普賢岳(主稜線上の、和佐又への支尾根上にも同名の山あり)を過ぎ、和佐又分岐(1700m)で一息入れて稜線通しに大普賢岳への登りにかかる(右側に捲き道もある)。08:00に頂上に立ち写真撮影などの後下る。少し下ると地図にミスプロノソキ(水太観)

とある草付きで東南側が大きく切れ落ちてい
る箇所にかかる。寄つて覗きこむが、直下は
見えず緊張する。その先の弥勒ヶ岳(165
0m)を過ぎ、最初のサツマコロピ(行者還岳の
下りにも同じ地名あり)を過ぎ、国見岳(1
655m)を通過して間もなく、クサリ場が
始まる。最初は5m位のトラバース、その後
10mの下降となり(地図の屏風横駈?)、総
じて下り気味のクサリの連続となる。緊張の
連続から空腹感を覚え、稚子泊手前で休憩し、
ロシアパンをかじる。

腰を上げ、やや広い草原に岩の点在する
稚子泊を通過。さらに七ツ池を過ぎ10:00に
七曜岳に着く(1584m 計画では13時に
着く予定だったので、かなり早いピッチ)。頂
上で橋本さんがりんごを振舞い、緊張もほぐ
れる。門脇さんはロシアパンをカットした際
に大きな固まりの方を取り落とし、止まらず
に消えて行く、パンで良かった。

なお頂上の看板は「HOCHIYODAKE」とあ
り、さすが関西の山。その後もクサリ場の下
降が続く、稜線が上がった所で、棧道を渡し
てある所を進むが、横には初めてシロヤシオ
が咲いていた。その後若干のアップダウンを
繰り返して進み、1485mの小ピークで休
憩。危険な箇所も略終了し、草の道を進む途
中、大阪工大WVの遭難碑などもあったが、

11:30 に行者還岳手前の捲き道との分岐に出
た。標識の所にザツクをデボし、空身で頂上
を目指す。頂上直下には濃い色の石楠花の塊
があったが、突然頂上から人声が聞こえた。
この日初めての他のパーティー。

頂上(1546m)は樹に囲まれて全く眺
望がきかず、記念写真のみ撮って直ちに引き
返す。分岐からザツクを抱き、東側の滑りや
すい斜面をトラバースしてしばらく行くと、
下りのハシゴが現れる(2番目のサツマコロ
ピ)。途中水場があり、若干補給していく。こ
の間に頂上に居たトンネル西口からの日帰り
オジサンパーティーが追越して行った。

ハシゴを下り、しばらく斜めに下降する道
を辿ると右手上部に小屋が見え、行者還小屋
に到着した(12:20)。小屋に入るとトンネル
東口から登ってきた男女混成パーティーが休
んでいたが、間もなく行者還岳目指して出発
して行った。

小屋は新しく、避難小屋としては大変立
派なもので、砂利敷きの土間と2区画に別れ
た板の間6畳と12畳、12畳の上には中2階
があった。その他に屋内に蛇口付きの水場が
あり、屋外(同じ棟の中に)2個の個室のト
イレも付設され、和式だが比較的清潔で、臭
いも少なくマズマズであった。寝具類として
かなり沢山の毛布が部屋の隅に畳まれていた

ので使わせてもらう。到着後しばらくすると
予報通り雨が降りだし、しばらくすると風も
出てきた。予定より1時間早立ちしたお蔭で、
濡れたハシゴ、クサリ場を避けることが出来
たのは何よりだった。

落ち着いたところで本日も開宴。この夕べ
の飲み物は「白牡丹」「甘露」「マオタイ」「テ
キーラ」「BALANTIN17年」「ツマミにメザ
シ、タタミイワシ、青菜台」「Schinkenの
ビーフジャーキー」に乾き物など。メザシな
どをバーナーで炙りながら飲み進めるうち
に、夕食の準備にかかる。

メニューは鰻丼、マーボー春雨、キュウリ
漬けなど。蒲焼を湯煎し、アルファ米の上
にのせれば立派な鰻丼に、またマーボー春雨
も結構行ける。これらは本間シェフのお得意
で、水さえあれば軽量で高張らない材料なの
で今回の様な山行には有効だった。

お腹も膨れると睡も重くなる、昼寝する者、
飲み続ける者、一眠りからさめて又飲む者、
至福の時間を過ごす。雨は夜になって止ま
らず、吹き降り模様であった。

6/3(火) 雨

この日は広島からの村上さんとのランデ
ブーの予定なので、トンネル西口への迎え飲
料、ツマミ類のポツカ)のメンバー選定、方

法などを協議し、やはり、住高山岳部メンバーによるお出迎えが良い、本間さんには縦走路での荷物番をお願いするとの結論になる。

村上さんが到着する予定時間から逆算、ゆっくり過こして07:00に雨の中を出発する。縦走路は奥駈出合まではほぼ1500m前後の緩い起伏の道で一の峠までは南下し、そこで西に大きく曲り、出合、弥山に向かう。

ブナやツガの樹の間を進むと笹原、コバイケイソウの群落、雨に打たれた沢山のシロヤシオの花びらが道に散り敷く所など色々と変化に富む道であった。奥駈出合へ2・4kmの標柱を過ぎ、1465mで一息入れ、しなのき平を通過、08:20に一の峠避難小屋に着くが、窓も壊れ廃屋同然。ここに荷物をデポして迎えに行くこととするが、こんな所で2時間以上も待つのは耐えられないと、本間さんも迎えに降り、直ぐに登り返すことになった。08:30に小屋を出て25分でブナ、ツガの林の中にシロヤシオが満開の出会いに到着。息を整えてトンネルに向けて急な道を下る。下ること40分、トンネル西口に着き、村上さんの到着を待つ。

10:00過ぎに本間さんが登り返して行った。10分後位に村上さんのタクシーが到着、持参してもらった大事な飲み物、ツマミ類をサブザックに手分けして担ぐ。出合まで3

ピッチで11:30に着き、先行した本間さんがデポした自分のザックを回収して戻るのを待つ。12:10頃に下から本間さんが歩いてくるのを認め、橋本、門脇、竹中の3人がすれ違つて荷物回収に向かう。12:30~40に小屋に戻ってパッキングし直して出発。丁度30分で再び出合に着いて小休止。先行する本間、村上さんを追って進むが荷物も増え、なかなかピッチが上がらない。

弁天の森(1600m)、聖宝の宿(1490m)の間は比較的なだらかな樹林帯の道で、そこにシロヤシオの花が咲き、あるいは道に白く散っていた。聖宝の宿の看板にはこれから登山道の傾斜が強くなる(いわゆる聖宝八丁)ので1時間かけてゆっくり登ることとの注意書きがあったが、最初はジグザグに登るが1700m辺りから木製の階段が現れ厳しい登りを強いられる。雨も小降りになり、薄明るくなる空の下でこの胸突き八丁を2ピッチで乗り切り、弥山小屋には15:44に到着した(1880m)。

途中、「ヤッホー、ヒトーツ」のコールが聞こえた様な気がしたが、足音に紛れてハツキリしなかったので返さなかった。後で確認したところ矢張りコールしたとのことだった。

弥山小屋に入る。管理人が本日の泊り客は我々一組だけとのこと、乾燥室に雨具を掛

け、落ち着いて先ずはビールを買い求めて乾杯。玄関の土間の脇に簡単な休憩スペースがあり、そこで村上さん持参の「賀茂鶴(弘法大師)」、「ヘネシー」、老酒を飲みながら広島産牡蠣の味噌漬け、燻製などをツマミに、昔の住高山岳部の思い出話に花を咲かせた。(総歩数13・2千歩)

6/4(水) ガス後曇り時々晴

朝食前に八経ヶ岳を往復すべく、4時起床、04:40に空身で小屋を出発した。最初は大きく下り、途中オオヤマレンゲ自生地を鹿柵で保護している所などを横目に、また登り返して5分の少憩後、近畿最高峰八経ヶ岳(八剣山、仏経ヶ岳1915m)に到着。

残念ながら遠景はガスに隠れていたが、苦労して最終目的地に達した充足感があった。直ちに小屋に引き返し、そのまま弥山頂上(1895m)の神社(天河大弁才天社)にお参りして記念撮影したが、神社の手前には山上ヶ岳辺りとは異なる紅の濃い石楠花が満開であった。

小屋に戻り朝食を摂る。小屋から電話でトンネル西口へのタクシー予約の確認を入れ、07:00に小屋を出発し下山にかかる。途中新潟からのパーティーとすれ違ったりして、聖宝の宿通過、弁天の森、石休の宿と進み、3

ピッチで輿駈出合に着き(08:55)、蜜マメを食べて一休み。これ以降下から登ってきてシロヤシオの花を撮影する人々が増えてくる。

2.ピッチでトンネル西口に到着(10:00)するが、丁度予約したタクシーも到着し、入山する時に約束した通り、冷えたビールを積んで来たので先ずは乾杯。運転手から天川村事情などを聞きながら林道を揺られて弥仙館に着く。4日間の汗を流し、さっぱりした所で打ち上げの宴会。美味しい鮎、アマゴ、冷奴、カミニリコンニャク、蕎麦などで酒も進む、一人5合以上は飲んだかも…。

15:00 過ぎのバスで下市口に出て、阿倍野橋行き近鉄特急に乗車、竹中、本間は他のメンバーと別れ、檀原神宮で乗り換えて京都に向かう。京都発18:29のひかりで新横浜に着き、夫々21時半過ぎには自宅に帰り着いた。(総歩数13・1千歩)

本間さんはこれを契機に八経ヶ岳を越え更に南へ前鬼^{ぜんき}まで足を伸ばすことを目論んでいる様子。これは懸案の谷川岳縦走を済ませてからではないでしょうか…。

リングに立つ

安島 孝知(昭59年卒)

2007年11月25日、私はリングに立っていた。赤のグローブに赤のヘッドギア。足のレガースも赤。キックボクシングの試合。アマチュアとはいえ、これがデビュー戦。ここにこぎつけるまでに、4年を要していた。

私は46歳。対戦相手は極真空手出身の18歳。リングサイドでは15歳の愛娘が固唾を飲んで私を見上げている。負けられない。ゴングが響く。赤コーナーのポストをポーンと叩き、私はリング中央に飛び出していった。

大学で体育会山岳部の山登りをやってしまつと、多少のスポーツでは満足できなくなっていた。やわに感じるのだ。ゴルフは、歩けるつちは絶対にやらないと意固地になっている。そのくせ、トライアスロンの大会にフルで出てみたところ、これはかえって体に悪いと、尻尾を巻いた。結局、週2回、スポーツクラブに通いエアロビクスに興じることに

なった。言い訳ではないが、結構、ハードなスポーツだ。20歳の頃は、インストラクターまでやった。社会人になってからの25年間、週2回のペースは、続いている。

エアロビクスの生活も継続するには変化が必要だ。数年前から、はやりだしたボクササイズ。これにはまった。音楽にのって、ボクシングのシャドーをやったりするやつだ。エアロビクスの延長なので女性のほうが多い。はじめは、拳の握り方から教わり、左ジャブの出し方、右ストレートの腰の入れ方など基本から学んだ。教えてくれるインストラクターは、元極真空手全国3位の美人であったり、リアル・テコンドーのいけめんファイター、現役のキックボクサーなど。ちなみにこのキックボクサーは、2008年秋、K1 MAXの最終日に出場していた実力派。

インストラクターは、格闘技を日頃からやっているの、シャドーだけを教えていたのでは、不完全燃焼。一方、私は子供の頃、剣道、柔道をやっていたので、昔の格闘技の感覚が蘇ってきて、もつと、もつと、という気分であった。両者の意見は一致して、シャドーが終わったら、インストラクターが構えるミットを殴ったり、蹴ったりする、ミット撃ちを始めることになった。

このミット撃ちが闘争本能をかきたてた。



健闘する安島選手（左）

思いつきりワン・ツーを撃つ、インストラクターがうなずく。すかさず左ミドルキックを蹴り込む、インストラクターの体が浮く。野獣のような声を発しながら、練習は続く。自分の中にこれほど凶暴な心があったのかと驚いた。腕の筋肉がついて、パンチが強すぎ、拳を痛めるといふことを学んだのも、この頃。こうなると、とまらない。軽くて良いので、スパリングをしようということになった。お互いに、殴り蹴り合うやつで、軽めだとマス・スパリングと呼ぶ、グロープのほかに、マウスピース、レガース、ファールカップ（金

的の保護）を購入。余談だが、ファールカップは何故か皆、大きすぎるサイズを買ってしまったので、買われる方は気をつけて。軽めのスパリーなので、ヘッドギアはつけない。しかし、アニメのガンダムのような物々しい姿となる。

生徒同士がやるのをインストラクターが見て回る。「軽めですよ」と何度も念を押された。軽めに始めるのだが、偶然にタイミンクの良いパンチが入る時がある。そうになると、パンチを浴びた方が強烈な反撃をすることになる。反射神経のなせる業で、わかっていても、どうにもとまらずエスカレートし、気がついたらとんでもない撃ち合いになっている。インストラクターが二人の間に足を突っ込んで引き離すことになる。後で知るのだが、スパリングは責任者の許可をもらい、誰かがレフェリーとして見ている状況でないことやってはいけならしい。核の抑止力という言葉があるが、スパリングをやっていると、その抑止力がいかに机上の空論であるかがわかる。

ここで問題が持ち上がった。かなり本格化してしまった我々のクラスを、他の会員が野蛮だと非難してきた。それもそつだろつ、普通にエアロビクスを楽しんでいるスポーツクラブで、ガンダムの格好をした者達が咆哮を

あげ、殴り蹴りあっているのだから。我々のクラスは、スポーツクラブから消されることになった。クラスの復活を掛け合ったが、かなわなかった。

私の気持ちは、治まらなかった。本格的なキックボクシングジムを探した。家の近くにUWF系のジムを見つけ、即、入会。UWFに関しては、色々と言りたいことがあるのだが、マニアックになるので省略する。ただ、かなりの有名プロ選手が出入りしているジムだ。私のコーチはキックボクシングの元世界チャンピオン。コーチの奥様は、女子プロレスの元世界チャンピオン。この家の母娘の鬼ごっこは見ものだ。ジムのリングの上で、母親が逆立ちのまま延々と続けられる。

このジムの生徒はほとんどが20歳代。年長でも30歳代。私は最年長。さらに、生徒の刺青率は、50%を超えている。コーチが、「ちゃんと仕事しろよ」と生徒を説教するときの仕事とは、アルバイトのことである。いわゆる社会の底辺から、腕一本でのし上がるようにしている若者たちが、集っている。挨拶は「押し忍び」だ。

しかし、私は初心者ではない。早速、スパリングを試みる。ここでは、ヘッドギアをつけるように指示される。気合をこめた1ラウンド2分の12ラウンド。不覚にも、このとき

初めて気がついた。敵は攻撃を仕掛けてくるということ。これまでが、甘かった。自分が一方的に攻撃するだけで、相手は受けてくれていたのだ。スポーツクラブだから、インストラクターは手加減をしてくれていたのだ。キックジムは違う。皆、真剣なのだ。あつという間に、鼻と口から血が滴り落ちる。鏡を見て、誰だ俺の顔をこんなにしたやつは！と思った。この頃からだ、会社で私が格闘技をやっているのではないかと噂が立ち始めたのは、目を青く腫らし、口元は紫。口の中はざくろ状態。ローキックを受け、痛んだ足を引かずっていた。

このままでは、やらねばならぬ。本気モードになった。自宅の部屋に吊るしていた30キロのサンドバックでは物足りなくなった。妻に頼んで、65キロのものをボリーナスのご褒美として、買ってもらった。梁に吊るすものだから、撃つと家が揺れた。1年もするとパンチとキックが重くなり、相手をコーナーに押し込むこともできるようになってきた。痛いのは嫌だから、自然と防御も備わってきた。そんな時、コーナーから言われた。「安島さん、もう、試合出られますよ。」

その日から3ヶ月間、試合に向けた練習が開始された。週4日。夜の7時から12時前まで。仕事の合間にキックをしているのか、キッ

クの合間に仕事をしているのか判然としなくなってきた。今日も練習かと思うと憂鬱だった。何度さぼろうと思ったことか。夏山合宿か、冬山合宿のようだった。試合の1週間前に練習のピークを持っていく。体重は80キロで変わらなかつたが、体脂肪率は13%まで落ちた。最後の1週間は疲れを取っていくのでは楽だ。だが、この頃から恐怖心が首をもたげ始める。執拗な恐怖感で、のどが渇き、反吐がこみ上げてくる。心が疲弊した1週間であった。

試合の当日は、朝9時から計量。参加者は約200名。K1やDynamiteで人気が出てきたためか、参加者が多い。腕に覚えのあるヤンキーが200人といった風情だ。シニアの部はあるのだが、40歳以上でキックをやっている人は少ないので、ほとんどマッチメイクされることはない。よって、冒頭のように18歳の極真野郎と拳を交えることになった。息子と変わらない歳だ。

試合は、1ラウンド2分の2ラウンド制。勝敗はKOか判定でつける。1ラウンドで2回ダウンさせたらTKO勝ちとなる。試合は凄惨を極め、結果は惨憺たるものだった。テクニクに勝る極真野郎は終始、カウンターパンチを顔面にヒットさせた。私は、それぞれのラウンドで、一度ずつダウンを奪われた。

頭の中では「立つんだジョー！」のフレーズが鳴る。世話になったコーナーチがセコンドにいます。ジムの仲間が大勢リングサイドに詰めている。なにより、可愛い娘が俺を見ている。立たないわけにはいかない。拳をリングに叩きつけて立ち上がる。応援が選手を奮い立たせるといわれるが、これがそうなのだと思感した。何とか立ち上がり、TKOを免れ、判定に持ち込むのがせいぜいであった。

リングを降りたら、2人のドクターが駆けつけてきて、指の数を数えさせられた。ここはどこですかとも聞かれた。Tシャツは血だらけ。あとで気づいたのだが、あばら骨もきれいに折れていた。それでも、氷嚢で顔を冷やしていたら、たとえようのない快感に包まれてきた。すぐ、次の試合にエントリーした。あれから一年。まだ、一勝もしていない。だから、キックはやめられない。それに、ジム仲間の私を見る目が、どこか優しくなってきた。格闘技の世界では、試合に出ることが、ひとつのステイタスなのだろう。20歳代の刺青ヤンキー達に囲まれて、気分よく、撃ち合っている今日この頃である。

口の悪い仲間はこんなこと言う。プロなら試合で撃ちあっても金を貰える。安島はアマチュアだから試合の参加費を払っている。金を払ってまで殴られたいのか？と。俺だっ

て、勝てると思うから払っているのだ。放っておいて欲しいものである。

アジア往復旅行1年2ヶ月

バン格拉デシュ編

法曹関係者との出会い・交流

田形 祐樹（平6年卒）

私は2006年10月から2007年12月にかけて日本からトルコ・イスタンブールを往復する形でユーラシア・アジアの20カ国を旅した。ここではトピック形式で全45回に分けて私の旅を振り返りたい。

今回と次回は法曹関係者との出会い・交流について。というのも私が旅行に出かけたのは司法修習を修了し弁護士資格を取得した後だった。そこで「アジアの弁護士法曹関係者と会って話してみたい」という目的もあったのである。結論からいうと国は違えど同じ弁護士法曹ということで問題意識や話題が共通した。そして連帯感もありとても有意義な交流であった。

法律事務所を訪問したり裁判所につかがりたり弁護士と話ができた国は、バン格拉デシュ、ネパール、パキスタン、トルコ、イラン、アゼルバイジャン、アルメニアそして中国である。今回はその中で一番印象に残っているバン格拉デシュについて。

ダッカにて司法実務修習

ダッカには、特にこれといった観光名所はない（と思う）。「貧民窟」として有名なオールドダッカ（ダツカ旧市街）がある。「貧困」をバン格拉デシュ名物としてはバン格拉デシュには失礼だが、これは見ておかなければならないだろう。ところで、当のバン格拉デシュ人は、会話をしていると「二言目には「俺たちは貧しい」と言ってくる。他の国ではあまり聞かなかつたが、貧しいから援助してくれ」みたいに聞こえ、あまり心地よいものではなかつた。「そうだ、バン格拉デシュは貧しい。日本は豊かだ」と正面から答えるわけにはいかず、困った。

そこで、日本のガイドブックでオールドダッカの地図をみると「裁判所」と、その近くに「法律事務所街」というのがあるのではないか。これは面白そうだ、オールドダッカ探訪のついでに、ちょっと覗いてみるか、という気になった。フレンドリーなバングラ

デシュ人のこと、弁護士であっても、私の訪問を歓迎してくれるのではないかという下心もあった。

オールドダツカは汚かつた（食事中の方、ごめんなさい）。多くの男が「座り小便」をしている。「立小便」ではない。「座り小便」とは、しゃがみこんで、相撲でいえば蹲踞のような姿勢から、社会の窓をあけて、排水溝の穴にめがけて小便をするのである。なるほど、これなら小さい排水溝の穴の中に、的確に尿を落とすことができるし、尿が足に跳ね返ってくることもない（私は真似しなかつたが）。ある本で、日本人が「ダツカは街全体が肥溜めみたいだ」と書いていた。ちよつとひどい表現だが、上記のような情景を見せられると否定できない。清潔好きの日本人は卒倒しうである。

ただ、オールドダツカは、昼間は人体に危害を加えられるような怖さはなかつた（夜は結構怖いらしい。襲われた日本人もいるとのことである）。物乞いもいたことはいたが、そんなに数は多くないし、それほどじつこくなかつた。

で、次に法律事務所である。こんな汚いところに、本当に法律事務所街があるんだろつかと思つたが、狭い路地を詰めていくと、あつた。向こうから背広を着た人達が次々とやっ

てくる。コンクリートで固められた、小さな部屋（4畳半くらい）がいくつも集まっている（ちよつと独房みたい）。決して、日本の法律事務所のようなきれいなところではない。

そこをウロウロしていると、おじさん1人とおばさん3人が内部で話している事務所があった。おじさんはラフな格好をしている。私は、「この人が弁護士なのかなあ」と疑問に思いつつも、そのおじさんに声をかけようとした。ほぼ同時くらいに、そのおじさんが「どこから来たのか?」と聞いてくるので、「私はジャパニーです。私はロイヤーで（厳密には弁護士資格をもっているだけなので経歴詐称になります。厳密に話すが面倒くさかったのです。すみません）、バングラデシュの司法制度に関心があります」と答えた（ちなみに、バングラデシュ、インドでは英語が通じる人にも「lawyer/ 法律家よりも、Advocate/ 弁護人のほうが通りがよかった）。

そうすると、そのおじさんは「おおそつか。まあ入れ。そこに座りなさい」と自然に促してくるので、私もそれに従った。でも、そのおじさんには、ほとんど英語が通じない。背後には英語の法律書がたくさんある。私は本当に、この人が弁護士なのかなあ」と思っていた。しかし、私が「記念に写真を撮りましょ

う」と言うと、そのおじさんは、堂々と椅子に座って、ポーズをとった。私は「ああ、ラフな格好をしているけど、この人が弁護士なのだな」と思ってしまった。

しかし、すぐに本物の弁護士が帰ってきた。背広を着て、先のおじさんよりパリッとしている。ムスリムのようで、ムスリム用の帽子をかぶっている（以後、この弁護士のことをタムラ先生とよぶ。私が、鳥取の司法実務修習で、正式な修習担当でないにもかかわらず、大変お世話になった弁護士にちなんでである）。

私は一瞬あせったが、その弁護士が「ほう、日本から来たか、バングラデシュの司法制度に関心があると、それはとても光栄なことだ」と言い、「座っていいよ。これから法律相談なので、見ていきなさい」というではないか。実は、先のおじさん、おばさんはタムラ先生の法律相談の相手だったのである！

このおじさんたちも、いきなり訪問してきた外国人の私が法律相談を見るのを、歓迎するような態度をとる。こんなことが、日本の法律事務所で起こりうるだろうか？ いきなり訪問してきた外国人に法律相談を見せてくれるだろうか？ 私は、バングラデシュ人の底抜けなフレンドリーさ、オープンさ、客人をもてなすホスピタリティーに驚愕してし

まった（バングラデシュ人自身も、客人をもてなすことは国の伝統だと言っていた。このようなケースはバングラデシュでは特別ではなかった。以後もバングラデシュで同じような経験をする）。

法律相談は、彼らの母語であるベンガル語で行われていたため、私はわからなかった。しかし、タムラ先生が時々英語で解説してくれる。彼の英語は癖があるが、バングラデシュはイギリスの植民地だったし、バングラデシュの司法試験は全部英語ということなので（タムラ先生談）、弁護士はしっかり英語が話せる。私より、ずっとつまい。ただ、発音に癖があるし、私のリスニング能力が乏しいので、厳密なところでは聞きとれていなかった。しかし、大筋では理解できた。

その法律相談の内容は、法律相談に来ていたおじさん・おばさんの親の遺産（不動産）相続をめぐるものだった。私が「日本でも、同じようなことが、よく問題になりますよ」と言うと、タムラ先生が「現場が近いから、今から一緒に現場に行こう」と言う。異議がないので、田村先生とサイクル・リキシャーに二人乗りして5分ほどの現場へ。

現場は、オールドダツカから少し離れているが、狭苦しくて、ごちゃごちゃして汚い。そこにある法律相談相手の一室を借

り、親族を集めて、タムラ先生が親族間の議論を聞いている。時々、タムラ先生が口を挟む。やがて、タムラ先生が「よし、わかった。こういふようにしよう」と言い、解決策を示すと(どのよう)に分割するか示したようである(親族間の議論も終わった。法律相談というよりは、紛争の仲裁のようであった)。

やがて、その親族の一人がタムラ先生に、そのままむき出しの札束で20000タカを渡した(1タカは約1・5円)。これはバンクグラデシユ人の水準からするとかなりの高額である。私の宿代は、だいたい1000タカから2000タカ。公務員の一月の給料が50000タカとかいふ話である。

タムラ先生が「今日はこれで終わりだけど、他に何か君にしてあげることはあるかな?」と聞いてくるので、「ご迷惑でなければ(いかにも日本の表現で、真意が伝わっているか不明)、明日、裁判所に連れて行ってほしい」と言った。ただ、そのとき、私の格好は、チベツトでキャラバンをしているときのようなラフな格好だったので、タムラ先生は「背広と革靴で来なさい」とおっしゃった。

その日、私は、宿泊先のホテル近くの市場で、背広、ワイシャツ、革靴を買い揃えた。これら全部で日本円で20000円くらい! 背広は、よくみると内側に漢字で「滝」と刺

繍されていた。どうやら日本からのお古のよう(以前、日本で滝サンが着ていたよう)である。今、滝サンは、日本のどこに居るの(どう)か、もし私がその背広を着ていることを滝サンが知れば、どう思う(どう)かと思いつつ、ひとりほくそえんでいた(この背広等は、これ以降も活躍。お陰で、インド人に展覧会に招待されたり、ネパール人の結婚式に出席できたりしている)。

2日目、タムラ先生は他の用事があり、忙しい(よう)で、他の先生(弁護士)を紹介してもらった(この弁護士のことを、これも鳥取の司法実務修習で大変お世話になり、いろいろと教えてくれた弁護士にちなんで、コマイ先生とよぶ)。

コマイ先生も、私を大歓迎してくれた。「君にバンクグラデシユの司法制度を教えることは、私の大きな喜びである」と言ってくれた。事務所から歩いて3分ほどのダツカ地方裁判所に連れて行ってくれた。

暑いということもあり、裁判所の部屋の天井にはファンが回っており、部屋は開けっ放しである。冷房の部屋はまったくない。関係ない人もぞいている。弁護士、裁判官は全員背広だったが、書記官らしき人はごく普通の私服。

裁判官は、弁護士、傍聴席よりも一段高い

ところに座っている。その後の刑事事件の手続きでもそうだったが、法廷の基本的なつくりは、日本とほぼ同じだった。

そこで、どういふ手続きが行われているか、よくわからなかったが、後のコマイ先生の解説によると、裁判官が弁護士のアピールをヒアリングしているとのことであった。私は、蒸し暑い中、ネクタイをつけて、背広を着ていた(ので、ぐったりしてしま)った。

また、裁判所内もすごい。通路には物置、敷地内には果物やチャイ(ミルクティ)の屋台。コマイ先生も暑いらしく、屋台でココナツを二つ買い、私にも飲みなさいと勧められた。ココナツの汁を飲み終わった後は、内側の果実もヘラで取って食べる。さっぱりして、おいしい。

3日目は、タムラ先生に、正式な裁判手続きをみせてもらう。刑事事件である。法廷の後ろに、鉄格子の部屋?があり、その中に被告人がいる。それも4、5人。いっぺんに3件まとめて処理するようである。日本では考えられない。鉄格子の中にいる被告人が、こちらをぎらぎらとした目つきで見ている。

タムラ先生の解説によると、その裁判手続きでは目撃証人の証言が行われていた(よう)である。

この日、私のダツカでの実務修習も終わ

り。私は、タムラ先生とコマイ先生には、それぞれミヤンマーで買った服やネクタイを差し上げ、丁寧に御礼を言い、オールドダツカを後にした。

バングラデシユの司法制度は、バングラデシユがイギリスの植民地だったという歴史もあり、だいたいイギリス式を踏襲しているようであった(タムラ先生も、そう言っていた)。

カクネ里単独行

山田 秀明(平15年卒)

3年前に商大ルートととも、わたくしが憧れていた場所がもう一つある。それがカクネ里だ。しかも、残雪に閉ざされたカクネ里。そこに独り泊まり、鹿島槍北壁を登る。これこそが長年の夢であり、目標であった。

残雪のカクネ里。なぜ、ここか。それはやはり小谷部全助氏を抜きでは語れない。

昭和10年6月。氏は遠見尾根からカクネ里に入り、鹿島槍北壁右ルンゼを単独登攀した。もつとも、この記録は氏の代表的な二つの冬

バングラデシユで、司法制度がまともな機能しているのだろうか、などと失礼な考えを持っていたが、それは全く間違いであった。もつとも、そんなことよりも私は、タムラ先生、コマイ先生その他バングラデシユ人のフレンドリーさ、フランクさに感動してしまつたのであった。

期初登録録 荒沢奥壁北稜と北岳バット

レス第四尾根 と比べると後世の評価は

高くないし、すでに忘れ去られた記録になりつつある。それでも、私がここにこだわりたいのは、この紀行文がとても好きだからだ。

「針葉樹」8号に収められた記録文「カクネ里」は、きつと氏の代表作とも言える文章なのだ。ここで氏の山に対する姿勢がとても率直に述べられており、それがストレートに心に入って、揺さぶる。特に、

『私の終局の理想としてあこがれるのはカンチエジユンガでもない、エベレストでもない。あらゆる山々に一人喰入つて尚且深い自然の囁きに思ふ様胸を躍らせ得る山岳詩人の心境になりたい事なのだ』。

というところはとても大好きなのだ。どうしてもこの心境を追隨してみたい。追隨する

にはこのカクネ里に行くよりほかない、そう思い続けていた。

何度も計画を立てるが、6月は梅雨の時期。3年が経ってしまったが、前週、越後金山沢奥壁をやり遂げた精神力・体力の余力を生かし、2008年6月14日、大谷原へ向かった。

大谷原からカクネ里へ向かう。本来、氏の足跡を辿るだけなら遠見尾根から入るべきだが、休みが二日しか取れぬしがらみ、そして山々は下から登るのが本来の姿だとのわたしの小さな信念に基づき、ここは妥協させてもらおう。

氏が記した大川沢左岸の林道はすでに廃道。今はその痕跡すらない。したがって、沢を溯るしかないのだが、これがけっこう厄介だ。腰ぐらゐまである渡渉を何度も繰り返すしかないのだが、この水がとても冷い。もつと、本当にイヤになるほど。それもそのはず、上流へ行けば大きな雪のブロックが沢を何度となく塞いでいた。大沢を左岸から流入させるとこのブロックは本格的な雪渓へと形を変え、その上を苦もなく歩いていく。無雪期はこの大沢から白岳沢が難しいようだが、おかげさまで容易に通過。10匹程度のサル群れを気配で追いやると、本当にすぐにそこが白岳沢出合だった。



カクネ里より鹿島槍ヶ岳北壁

この白岳沢との二股のちよつと下に岩小屋があるはず。全助が絶賛し、通算5泊以上はしたと思われる岩小屋だ。おお、これが。全助が泊まつてから73年を隔てた今でも確かに「針葉樹」8号の記述そのままに岩小屋があつた。雪深からうへ3m上に大岩があつて、しかも下地は乾燥している。そしてあまりにも眺望が良くないことまでも……。氏が二回も泊まつたこの岩小屋で私も一夜を明かすのはとても魅力的で、この岩小屋で一晩過ごすのも当初の目的のひとつだった。しかし、しかし……。このまつたくもって面白くない景

色。また時間は12時前。陽もまだまだ高く、雨も降りそうな天気でもない。あと6時間もここに居るのかと現実的になつて考えると、すこし後ろ髪を引かれる思いはあるけれどもパスすることにした。

二股を過ぎるとカクネ大滝は雪で隠れていた。もし、滝が出ているとちよつと高巻きに難儀すると氏は書いているが、簡単に越すことができ、これを越せばカクネ里の全貌が見渡せられる。

「ああ。これがカクネ里か」

思わずつぶやいていた。青い空と白い雪深。それに続く鹿島槍北壁……。なんと「ホツとする光景」がそこにあつた。

先ほどの岩小屋のことは頭から離れ、私はここで泊まろうと決意した。カクネ里はほとんどが雪深で覆われているが、ところどころ地面が露出しているところがあり、その一つに、幸いにも自分ひとり用の平地があつた。そこで、雪深上には雪崩で飛ばされたのである。倒木があちこちに横たわり、薪には困ることはない。水も5分ほど下つたところで雪深にチヨロチヨロと流れこんでいる。そして、なにより、この絶景。

白昼の雪深に浮かぶ平地上。全助の書いた「カクネ里行」を声に出して朗読する。燃え盛る火を傍らにしてブランデーを嘗めつつ。

『雪に満たされた圏谷の真中をとぼとぼとたつた一人登る氣持』

ああ、俺は来たぜ。独りで雪に満たされた圏谷に来たぜ。自分はちよつと全助が味わつたであろう状況。6月の雪に閉ざされたカクネ里に独り。にある。静かだ。人工的なものはひこつき雲だけ。空は青い。雪深はまぶしい。そして北壁はとても潔い。吾も些かの不安も無く、焦慮もなく、彼らを打ち眺める。これこそ警沢なヒトトキ。これを幸せといわずに何をば言わん？。

ああ。きっとこれが「山岳詩人の心境」なんだらう。今、前にあるのは目で受け取る三次元の世界だけではない。耳で風の音を聞き、鼻で安堵の匂いを嗅ぎ、皮膚で自然の柔らかさを感じ、舌で優雅な時間の流れを味わつ。五感をフルに活用して、心の中に異次元の世界を作り出していた。そこにこそ、彼の棲家があるのだと悟つた。

夜は寒かつた。風が終始、雪深上を吹き抜け、焚き火も燃え尽きてしまった。さすがに、シユラフカパーだけだと身に堪え、ちよつとウトウトしただけであまり眠れぬ。しかし、月光ってこんなにも明るいなあ。逆に、深く眠れないことで得した気分になつてしまつた。

3時半に起き、朝飯を食べ、片付けだす。そして、雪に満たされた圏谷の真中をとほとぼとたつた一人登り始める。

朝方の雪渓は固い。昨日来たときはアイゼンも必要とは思わなかったが、さすがに中の沢を左岸から入れる場所までくると、傾斜も強くなり、ちよつと怖い。そこでアイゼンをつけることにした。

当初は全助が単独で登った鹿島槍北壁の右ルンゼに行く予定だった。しかしそれに行くためには奥の雪渓まで行かねばならぬ。しかし、どうだ。雪渓は上部に行けば行くほど、スタスタに切り裂かれているではないか。これは……ムリそうだ。だが、その年7月に鷹野氏と登った洞窟尾根は何とかいけそうである。右ルンゼにいけないのは残念だけれど、これに拘って怪我をしてもしょうがない。

取りつきでアイゼンを脱ぎ、靴もクライミングシューズに履き替える。まず洞窟の右のすつきりした壁（級）を15 m登ることから洞窟尾根の登攀は始まる。洞窟尾根の概要はこうだ。

洞窟の右の壁を15 m登る。

左へ10 mトラバース。

木を伝って20 m登る。

左側の草付ガリーを30 m登るとリッジ。

リッジ上は雪のブロックが乗っているの

雪渓上部からカクネ里を見下ろす



でアイゼンをつけなおして、3 m雪壁を登る。20 mのナイフリッジを進むと再び雪がなくなる。

クライミングシューズへ履き直して、草付スラブを登り、P1を左から巻く感じで登る。続く小ピークも左から巻く感じで岩登りするが高度感がある。

再びリッジに出ると、P2の圧倒的な壁が目前となるが、そこを右から巻くような感じで登る。

草付・灌木を伝い、あとはブロックを避けながら、右へ左へ簡単などころを選んでいくと、国境稜線。

こう書くとは簡単そうだが、だいたいがもし落ちたら『ハイ、左様なら』なわけで、「生」を実感できた有意義な2時間だった。しかし、

この洞窟尾根について全助氏は『簡単』だとか『エスケープとして活用できる』とか書いていたけれど、精神的にはそうとは思えず、修行不足を痛感する。しかも、どう見ても彼が登った右ルンゼのほつが明らかに難しそうだ。やはり、氏は偉大だ。

終了点の登山道にて余韻に浸りながら、ゆつくりとゆつくりと周囲を見渡す。ああ、劔がきれいだ。白馬も五龍も全部きれいだ。限らない空に広がる光の散乱とまだ雪をまとった山々たち。ピーピーとまわる色とりどりの鳥。山っていいなあ。大自然っていいなあ。彼らの親身なる一瞥を確かに受け取りながら、私は一步一步、鹿島槍の頂上へと足を踏み出して行く。

人は、会うべきものに出会えることを仕合せと言つらしい。カクネ里はわたしにとつてはまさにそんなところだった。数年来、憧れ続けたカクネ里は期待を裏切ることなく、素晴らしい光景だった。さらに全助氏の心境に少なからず追隨できた気がし、また氏の偉大さも改めて実感することができた。

商大ルートもこのカクネ里も間違いなく私の会心山行の一つである。あのような立派な文章を残してくれた氏に心より感謝申し上げます。

新入部員歓迎懇親山行

高尾山 08年7月13日

高崎 治郎（昭31年卒）

待望の新入部員数名が入部し、しかも母校鶴丸高校卒が複数名いると佐薙から聞いては歓迎山行に参加せずばなるまいと勇躍出かけた。同期のオーション会（31年卒）にも声をかけたところ、千葉から石和田が馳せ参じてくれた。

当日は、梅雨の中の晴天に恵まれ、京王高尾線の高尾山口に陸続と集まったのは17名、うち新入部員6名参加、鶴丸女性2名4年生に、鶴丸3回卒だと自己紹介したら、55年先輩だと驚かれた。

人数が多いので、4人一組になって登るようにと竹中会長の指示で、後期高齢者の我々が、本間リーダーをトップにして9時35分出發した。ケーブルカー駅の左側登山口からの稲荷山コース3・1km（標高差約400m、標準コースタイム90分）は、なだらかな登りで、途中30分おきに10分の休憩を入れて高尾山頂着は11時15分、コースタイムより10分オーバーで済んだ。

頂上は、日曜日のせいか、さすがに人も多く、日陰の階段の所で昼食をとることになった。本間君がコンソメスープを、川名さんが

味噌汁を全員にサービスしてくれた。兩名共下から担ぎ上げた水をコッフェル（大鍋）に入れ、ラジウウスで沸騰させ、瞬く間に作り上げた。

八王子市を見降す山頂で、全員記念撮影したが、霧のため近隣の山はよく見えなかった。下りは山頂の北側のコースの自然林に樹木の名前が貼られてあり、学習コースになっていて、珍しい名前が多く見られたが、佐藤解説者の説明が聞けなかったのは残念。下山コ



スは人影もなく静かな山で、都心に近い山とは思えなかったし、時折、オオルリやウグイスが美しい声で鳴いていた。

山頂を12時20分、日影バス亭へ13時20分着、1時間で下山した。20分でバスが来たが、満員ギュー詰めですべて乗車し、14時過ぎには高尾駅着。八王子駅ビル8階の反省会は、全員一緒に座れず、3カ所別々になったが、お茶の水女子大の鶴丸卒生と話す事が出来た。

山岳部員が一人もいなくなり、部の存続が危ぶまれていた時に、一挙に7名も入部、勧誘してくれた茶道部の師匠でもある佐藤さんは、救世主ならぬ救部者といふべきでしょう。

最後に鶴丸高校とは？ 鹿児島県立高校（旧一中、一高女が1950年合併）薩摩藩主鶴丸城の名を継承した公立の進学校。今年の合格者は、一橋大7名、東大22、早大49、慶応26、お茶の水6、九大46、鹿大80。

小生が生徒会長の時（1950）新入生歓迎の辞で、挨拶した「鶴丸とは勉強する所である」という言葉が校風として今も語り継がれていると後輩に言われて誇らしく思いました。因みに先7月に開催された東京鶴丸会には、550名が参加した。大田ひろ子財務大臣も鶴丸ですが、徳川の「篤姫」の様に女傑が出てくることをひそかに期待しています。

茅ヶ岳懇親山行（08年5月17～18日）

今回の茅ヶ岳懇親山行は、アダージオ集合の前に、幹事が登山ルートを周回組と縦走組と二つ用意し、出来れば茅ヶ岳頂上で、合流し、一緒に下山するという今までにない意欲的な計画でした。大変賑やかなアダージオの翌日、5月18日も皆さん大変活発に近くのお山を楽しみました。

山行幹事：蛭川隆夫、本間浩、金子晴彦

金ヶ岳く茅ヶ岳縦走

三井 博（昭37年卒）

私は縦走組に参加したが、葦崎駅からマイカーに分乗して、明野ふれあいの里パークに向かう。総勢9名で、本間リーダーのもと、早速歩き始める。明野は日本で一番日照時間が長い場所とのことであるが、本日はつすい雲がかかり、あまり展望は良くない。

緩やかな森林の道を進んで行く。森林浴のよつで極めて気持ちが良い。ウグイスなどの鳥が盛んに啼いている。森林が次第に灌木になると、右側に茅ヶ岳を見ながら登つていくようになる。まもなく、岩混じりの登りとなり、約2時間10分かけて、金ヶ岳（1703・6m）の頂上に着いた。

昔の本には、金ヶ岳は茅ヶ岳よりも眺望が

良いと書いてあつたが、樹木が成長したと見えて、展望はあまり良くない。ここで昼食をとることとした。昼食後、茅ヶ岳に向かつて縦走した。一飛びというわけにはいかず、約50分かけて茅ヶ岳頂上に着いた。頂上には、周回組の石原さん以下がやや待ちくたびれた表情で待っていてくれた。ここには何故か瘦せた野良犬がいて、しかし人懐っこそうに愛想を振り巻いていた。

周回組は先に下山し、我々は少し遅れて腰を上げる。チャチな深田久弥終焉の杭を通過し、何故か枯葉が積もっている道を下って行くが、いつしか班が二つに別れ、三人ほどが見えなくなつてしまつた。女岩に着き、名前ほどでもない流水を眺め、水を汲んだりしていたが、後続部隊は一向に現れない。大分経つてから、後続は女岩をカットして先に下りていることがわかり、今度は我々があわてて、追いかける。このチョンボで大分時間をロスし、時間があつたら寄ろうと幹事が考えていた、酒造りの「七賢」は時間切れで寄れなくなつてしまつた。誠に残念であつた。

守屋山

遠藤 晶土（昭37年卒）

18日、三井兄と守屋山に登る。諏訪神社の御神体の山だが、『守屋』は達御名方命の諏訪

神社と共存して、現在まで続く旧家の名だ。そんな「歴史」の山に登れるのが嬉しい。緑滴る道を2時間ほどで守屋山東峰。西峰へと行きかけたとき、三井兄「調子が悪いから遠藤一人で行つて来い」。ウワー、彼からこんな素晴らしい言葉を初めて聞いた。直ちに下山。中央高速を、絶え間なく会話して睡魔もなく15時無事、八王子駅で解散。

御泉水自然園

高橋 信成（昭38年卒）

御泉水自然園は蓼科北側標高1830mに広がる自然園です。17日、皆さんが茅ヶ岳に行かれている間に小野さんと二人でピーナスラインを車で登り、ビジターセンターに着きました。自然園は蓼科山7合目の登山口に隣接する区域にあり、道路を挟んで二つの部分に分かれています。

まず右側の伏湿原植生と亜熱帯現世入り、御泉水川をみた。トウヒ・シラヒソなどの樹林がある。ここは蓼科牧場からゴンドラで来ることも出来、頂上駅付近には高山植物がまとめて区画別に植えられている。カタクリの花が咲いていた。道路の反対側はツガの径・カラマツの径・蓼仙のタキなどがあつた。左右併せて全長10km面積170haの楽しい散策コースがあつた。

アダージオ

蛭川 隆夫（昭39年卒）

韮崎駅で帰京組四氏（石原 小島 三森 前神）と別れ、途中「縄文の湯」で汗を流し、アダージオに。

この懇親山行をこれまでの晩秋から、新緑の季節に実施。心配もあつたが、結果は特別参加の斉藤正夫人、故山本健一郎夫人を含め20名にもなり、向かいのペンションも借りる程の多数参加（幹事一安心）。上原さんの乾杯に始まり、今日一日車の運転でお世話になつた斉藤氏夫人からご感想を、故山本氏夫人から思い出話を、最長老の山崎さんと最若手の佐藤（活）さんからそれぞれ一言、メインスピーカーはアメリカから参加された塩川さん。その間テーブル毎の、テーブルを回つての懇談、歓談。賑やか、賑やか、盛況、盛況。飲み足りない面々は向かいのペンションで二次会を。山の唄とお酒で盛り上つたまま消灯時間（11時）を迎え、気持ちよく散会。今日の盛会を見るに付け、これまで山本健一郎さんの打たれた手が着実に根付いていることを感じ、感謝しながら就寝。

霧訪山

きりつやま

小野 肇（昭40年卒）

アダージオでゆっくり朝食を頂き、石井、

山崎、有賀、高橋、小野の5人は高橋さんの運転する皇帝色の黄色の車で出発、諏訪から高速で塩尻に出て国道153号を南下、中央分水嶺の善千鳥峠をなだらかにくだり小野神社に出る。隣の矢彦神社を右折、案内板に沿って農道を進み簡易トイレのある駐車場にとめる。7台ぐらいいは駐車可能。

登山口は「歓迎名峰霧訪山登山口」の横断幕の前で記念写真を撮り、ゆつくり登り始める。最初から200段以上ある階段状の急騰をピスタリ、ピスタリ。

天気快晴、風も無く穏やかな一日。御岳大権現と記された石碑の前で一本。この山はきのこ山で登山道の両サイドにテープが張られている。「止め山」と言うそうだ。用足しても罰せられるのかな？

かつとり城址跡地には鉄塔が立っている。ゆつくり通過、三角屋根の避難小屋前で小休止の後きつい登り。登り切ったところで息を整え、ゆつたりした気分で頂上を踏む。頂上は抜群の眺望、おきな草がロープでかこってあった。絶滅危惧種とか。花は終わっていた。天気が良すぎて遠望がかすむ。大滝、常念、奥穂高が望めたが槍は未確認。頂上で昼食、記念撮影をしてゆつくり下る。

下山の後は、アダージオで頂いた清酒『夜明け前』を求めに小野酒造へ。日曜日なので

お店は開いているのに誰も居らず、高橋さんはお金を置いて入手。残りの皆はコンビニで求める。10時に登山口、11時45分から12時25分が頂上、13時20分に登山口ののんびりゆつたりの一日でした。

蓼科山

本問 浩(昭40年卒)

今朝アダージオに到着した高崎さん、昨日茅ヶ岳縦走組で一緒に仲田さんと三人で高崎さんの車で蓼科山登山口の女神茶屋に向かう。8時半、登山口から一汗かいて笹の原を登ると穏やかな山道となる。その後は樹林帯の一本調子の登りが続く、次第に樹林が少なくなると明るい岩の多い沢の道が延々。

体内に酒を残して登れるような山、ルートで無いと思いつながら足を運ぶ。いい加減バテ出した頃頂上へ続く岩のガレ場となる。ここで一休み、そしてやつの思いで山頂へ、12時20分。頂上は意外に風も無く、バーナーを出しトン汁を作り昼食。高崎さん朝抽のコーヒを味わい、記念写真。13時15分頂上を後にして16時半女神茶屋。8時間の行動でしたが疲労感はなく、中身の濃い山でした。

茅ヶ岳周回

小島 和人(昭40年卒)

周回組の石原・上原・塩川・山本・有賀・蛭川・小島・斉藤の8名は9時25分、深田記念公園の駐車場を後にして葦崎市北杜市境界尾根を登る。頂上直下を含めて二、三急登もあつたが、おしなべて緩やかな、そして新緑に包まれて穏やかな尾根道を2時間半、3ピッチで茅ヶ岳頂上に着く。

縦走組は金ヶ岳で昼食との事で周回組だけで山行幹事のもてなしの味噌汁なぞ楽しみながら昼食。薄曇りの天候で生憎、眺望は良くなく遥かに八ヶ岳らしき姿を望む。縦走組の到着を待つて記念撮影。13時半下りにかかる。深田久弥終焉の地を経て女岩で長休止。たっぷり新緑を楽しむ。予定よりかなり遅れて縦走組と入り混じり深田記念公園に3時50分に着く。

8月27(水) 仲田、本間

広河原で昼食を取り、12時に出発。距離はあるが、緩やかな大樺沢ルートに登る。曇り空で大樺沢も1000m先位しか見えないが、雨の気配はなく、16時頃白根御池小屋に着く。

しばらくすると鳳凰の方向に靑空が見え、明日は雨なしで北岳を廻れるのではないかとと思う。ただ天気予報では、明日28日は曇りと雨、29日も悪天候とのことで、悪天が一曰ずつ後ろにずれているように感じ、その旨竹中さんに連絡。

翌朝5時出発の予定で8時前に就寝。

8月28日(木)

4時起床。小降りではあるが雨。朝食の準備をしながら様子を見る。6時前に雨が上がり、とにかく行くこう、となる。ただ岩が濡れており、下りに時間がかかるので北岳は諦め、北岳山荘分岐あるいは八本歯のコルまでとする。

早いとは思ったが、こちらも早く出たいため6時半過ぎ竹中さんに電話、状況を伝え、即出発。二俣を過ぎ、しばらく登ったところ

で雨が降り出す。本降りに近くなったが、時間も早いので登り続け、八本歯の登り口、梯子の手前の右から入る大きな沢の辺りで札幌から来た中年夫婦に追い越される。

あと5分か10分でコルの梯子という地点でガツという音がし、岩が(畳1枚位か)大樺沢の中央を飛んでくる。近くの岩にへばりつき見送り、仲田さんが落石と叫ぶ。70〜80m下の登山者にも声が屈き身構える事が出来た由。これだけ大きな落石は初めての経験で、雨で滑り易くなっている事でもあろうし、ここで引き返すことにする。

ジグザグの道を左岸から中央に出ようという時に気づいた。岩が斜めに跳ねずに真直ぐ落ち、途中砕けなかつた等、運がよかつたといふ言いが無い。

9時30分に下り始める。左岸沿いに慎重に下り、12時前に小屋に着く。雨は一段と強くなり、小屋情報によれば30日も雨とのこと。その旨竹中さんに伝え、特に周回組は、今日の我々と同じ様に、途中で引き返す結果になると思われるので、中止をすすめる。

仲田さんは明日下山しなければならず、私もこのままでは沈殿続きになるだろうから、明朝、仲田さんと一緒に下り、広河原で入山組を待ち、今後を検討することにする。今晚着予定の西牟田さんにも明日の下山をすすめ

ることにし、一杯飲みながら時間をつぶす。

3時頃小屋の人から、今日6時にゲートを閉鎖、雨が続くようなら明日も閉鎖が続く、これから下山してはどうか。タクシーは我々が着くまで待つてくれるよう手配しておく旨話があり、仲田さんは下山を決め、私は今後のもあり予定通り泊まるつもりでいたが、小屋の人に単独では危険といわれ、一緒に下ることとし、3時半に出発。小屋の人の奨めもあり、急だが短い尾根筋の道を下り、6時前にタクシーの待つ広河原に。

天気予報と空模様には振り回されましたが、70歳プラス・マイナスとしてはこれが精一杯の処でしょうか。今でも落石をおもいだすと寒気がします。大急ぎで小屋を後にしたので、メモをどこかに忘れたらしく、時間がハッキリしないのですがご勘弁を。

今年の北岳での事故は、

(1) 20日前、広河原にテントを張り、北岳に向かったが帰ってこない人がいる。八本歯の向こう側に赤い、それらしいものが見えるが、悪天候のためへりが飛べず確認できない。

(2) 北岳と間の岳の間で、一人行方不明。

三月会通信

6月16日

「出席者」石井 山崎 佐雑 三井 高橋 蛭川
竹中 小島 高崎 佐藤久 金子 西牟田 本
間(記録)

話題

- 1 竹中彰さんから、写真付で「大峰山 ミニ奥駈
(山上ヶ岳、八経ヶ岳)」の話が出ました。住吉高
校山岳部OB4人+1「広島から村上さんも参
加し、なかなか楽しい山登りが出来たよつです。
大峰山(山上ヶ岳)は今も女人禁制を守っており、
お陰で静かな山旅ができた由。確かにオバサン登
山家の傍若無人の姦しさには辟易する処があり、
あと二つ三つそういう山があっても良いように
思ふ。山崎さんから昔は大山もそうであったと聞
いて、調べた処、江戸時代下社より先は女性立ち
入り禁止で、下社の左脇の急な階段を登りきった
左手に「女人禁制の碑」があるそうです。
- 2 三井博さんの「オザク山」(4月の会で、山行
報告に書かれたものですが書き直してくれたも
のです)

オザク山は宇都宮の西、日光の南にあり標高8
79m。オザク山は石裂山と書くが、とてもオザ
クとは読めない。田中澄江さんの新・花の百名山

を引用させていただくと、「日光開山の勝道上人
が、日光の前に古峰ヶ原で修行した。古峰ヶ原の
東南に石裂山があり、上人は古峰ヶ原に入る前に
石裂山で修行したのだらう」と書いてある。

当方は例の如く毎日新聞旅行のツアーでリー
ダーを含めて15名と手頃な人数である。マイク
ロバスで石裂神社を通過して、加蘇山神社のパー
キングで下車する。いきなり、警告という看板が
ある。「石裂山回遊コースは一部にハイキング・
コースとして紹介されていますが、本格的な登山
コースです。中ノ宮、奥ノ宮、東剣ノ宮、西剣ノ
宮、石裂山、月山、休憩所の中の岩場、錯場で、
平成3年3月から平成4年6月までに、転落等に
よる5件の死傷事故(うち3件は死亡事故)が発
生しています。本格的登山及びロッククライミン
グの経験のない方は入山しないで下さい」平成4
年6月 と警告があり、ギョッとする。

沢沿いの道を登り、中ノ宮に達する。リーダー
はストックはしまつこと、ハシゴは両端を持つよ
うに、鎖は股の間に入れて登るように、一人づつ
登ること、などと注意する。長いハシゴを登ると
太い鎖がある。急ではあるが、本格的な岩ではな
いので、注意しながら登れば、何と言うことはない。
但し、岩が湿っており、又次の短い鎖に移る
ときにトラバースがある。その上に又ハシゴがあ
り、それが終わると時計回りに岩道を進むと、奥
ノ宮がある。お参りしてバックするが、ここは注
意を要する。後ろ向きに下り、ハシゴまで到達し

て第一段階を終了する。このようにして、東剣ノ
宮、西剣ノ宮、石裂山、月山と進む。月山まで来
れば、休憩所までの下りは急であるが、山道で危
険性はない。休憩を含めて約5時間の短い山行で
あったが、緊張の連続で、ややしんどかった。家
に帰ると両腿が赤くはれ上がった。

このあたりは古代史の宝庫であり、阿蘇郡(栃
木県佐野、鹿沼あたり)の阿蘇は百済から渡来し
た阿佐太子という。「続日本書紀」に新羅人が多
数移住したとの記載もあるので、加蘇山神社や石
裂神社も由緒があるのだらう。以上は田中澄江氏
の受け売りであるが。

3 血液型

昔、縄文時代に東南アジア、フィリピンの辺
り?から、黒潮にのって南方民族が、日本にやっ
て来て四国南部、紀伊半島、伊豆半島遠くは房総
に住み着いたそうです。その辺りの人の血液型
は、東南アジアに多いO型が多いのだそうです。
ちなみに日本人はA型が4、5割、インド、アフ
リカはB型が多いそうですが、人類がアフリカか
ら全世界に拡散する時に、海を渡って直接インド
に行った人々がいた、という事なのでしょうが?
4 中村雅明さんの「岩櫃山」(会は仕事の為欠席
でしたが、山行記録を送ってくれましたので、掲
載します)

6月7日(土) 群馬・中之条近くの岩櫃山 四
万温泉への大学ゼミ旅行の帰りがけに誘われて
二人で登りました。802mの高さの割には名前

(お櫃形の岩山)の通り、立派な岩峰群が立ち並ぶ山でした。頂上の近くは鎖場、鉄梯子の連続で、ちょっぴりスリルのある山登りが楽しめます。た(相棒は大分怖がっていました)。相棒は史跡が好きなので、岩櫃山は武田三堅城の一つで歴史口マンを感じる城跡もあり、それも楽しんでいました。遠いのでわざわざ行く山ではありませんが、四万温泉の帰りに立ち寄るのはお勧めです。

山行報告

石井 5月18日 霧訪山 懇親山行の二日目
山崎 同上

5月1日 三ノ塔(丹沢)

佐藤 6月2日 箱根旧街道(東坂)

6月7~9日 吉田口(5合目)テント泊(小御岳)精進湖口(富士山々麓) 本間さんの新調テントの最初の客人。富士山原始林と青木ヶ原樹林を歩く。

三井 6月6日 草津白根山(2156m)雪あり。

ムラサキヤシオ、タカネサクラなどの花が綺麗

7日 根子岳(2207m)~四阿山(2354

m)縦走路が険しい。四阿山の北斜面はかなりの残雪。このコース2回目。8日 浅間山(前掛山

2524m)時間はかかったが、四阿山より楽。火山館の主人が一週間前に熊が出たとの話。カモシカを二度見かけた。おとなしくボーとしていた。

高橋 5月28日 大峰山(大山)厚木よりバス。

煤が谷から登りはじめる。

蛭川 6月6~9日 ペテカリ 久遠の山! 膝と手首を痛め、キリマンジャロに不安

6月14日 甘利山(千頭星山) 高校岳友慰霊登山

竹中 5月31日~6月4日 ミニ奥駆(大峰・山上ヶ岳)八経ヶ岳)本間・村上の一橋勢+大阪・住吉高OB。女人結界門の中は静かな山。良く登り、良く飲んだ。

6月7日 日光・太郎山 メトロ口会(首都圏の13大学の懇親の会)世話人会勉強会で日光・光徳荘に行った際に太郎山に登る。快晴の下、尾瀬の山、至仏・ヒウチ・平ヶ岳など眺望が良かった。

高崎俊 6月7日 蓼科山 懇親山行の反省を兼ねて、家内と。

西牟田 4月26~27日 西穂山荘 JAC2003の山行

本間 ミニ奥駆は竹中さん、富士山は佐藤さんと同行(ミニ奥駆:次回は八経ヶ岳の南に行きたい。富士山:精進湖口は3合目以下がお薦めです)。

7月22日

「出席者」石井 山崎 佐藤 高崎治 中川 遠藤 高橋 蛭川 竹中 小島 高崎俊 佐藤久中 村雅 金子 西牟田 本間(記録)

話題

キリマンジャロ参加者が打合せ会の後、そのまま三月会に参加したこともあり、他のテーブルから椅子を掻き集めなければならぬほどでした。ただ常連の三井さんが北海道の山で怪我をされ、この会と8月の山は不参加。残念です。早く元通りに良くなり、登山と記録文に活躍されることを祈ります。HP幹事の中村さんから、一橋山岳会(一橋山岳部+針葉樹会)のホームページをいよいよ8月1日に正式に運用開始することになった旨報告がありました。新入部員の勧誘、針葉樹会員間の親睦に力を発揮するものと期待されます。

山行報告

高尾山 新入部員歓迎山行 7月13日 参加者:(部員)原口 大橋 糟谷 田平 中村 植松(会員)高崎治 石和田 上原 三井 高橋 竹中 本間 佐藤力 西牟田 川名 山田

稲荷山コースから上り、高尾山山頂で昼食、いろはの森を日影に、老いも若きも元気々々、いつこつに疲れた様子もなく下山。いろはの森コースは道も歩きやすく、人も少なくお薦め(本間)。反省会は八王子駅ビルニユートウキョウにて愉快に過(す(竹中)。鶴丸高校後輩2名も参加で嬉しかった(高崎治)。

高尾山 6月20日 12月7日予定の針葉樹会 懇親山行の下見 参加者:蛭川 本間 昼から会 会員3名 タイム:3時間20分(登り1時間4

5分 下り1時間35分) 初狩から男坂経由で高川山山頂へ。駅からしばらく車道をいくが山道に入ると歩き易い土の道になり、ジグザグと直登の組み合わせで、難所もなくホステス犬・ベツキーの待つ山頂へ。頂上はそう広いとはいえず、15人前後が最適か? しかし見晴らしは良い。下りは田野倉へ。むすび山分岐まではどうと言うことのない下りだが、その先右に分かれて山腹の下りになると岩が所々にでてくる。しかし一歩々丁寧に歩けば問題ないと思います。

障子カ岳 7月13日 キリマンジャロ検診合宿の一部として 参加者 佐藤 中川 遠藤 蛭川 小島 小野 佐藤久 朝日連峰のキツイ山を往復(蛭川) 厳しい山でした(小島 遠藤) その他

山崎 7月12日 高尾山
佐藤 7月 ダイヤモンドヘッド あれは山ではないか?

遠藤 7月18日 雌阿寒岳 19日 雄阿寒岳 三井兄の百名山の一部として登る 雄阿寒岳完登後、登山口付近で三井兄転倒 全治2週間。

高橋 7月20日 鹿島川・大川沢 妻と。荒沢をひとめ見たいと思い、赤岩尾根下の駐車場に車を止めて歩きだしたが、雨のため途中で引き返す。その後大町山岳博物館にて小谷部全助大先輩の山日記を見てきた。

高崎俊 6月28日 ニユウ 石原さんの言葉に触発されて

7月5日 中八ツ周遊コース 麦草峠、丸山、中川、ニユウ、白駒池)

金子 6月28日 両神山 北京山の会計8名 日向大谷より往復 中学生時代からの憧れようやく実現 秩父の深さを実感

7月5日 笠取山 多摩川ウオークG8名 羽田から3年かけてようやく水源へ。皇太子登山で整備されていた。この山は縦走で通っただけだが実に良い。

西牟田 7月19日 火打(高谷池ヒュッテ泊)翌20日妙高。JACの同期会の定例山行。

本間 7月8、9日 塔ノ岳 他昼から会2名 表尾根を登り大倉尾根を下る。山本さんの蔵書のおかげで丹沢関係を尊仏山荘に置いてもらうための交渉山行。

8月18日

「出席者」 山崎 佐藤 三井 遠藤 高橋 竹中 小島 佐藤久 金子 西牟田 本間(記録)

山行報告

荒沢岳・平ヶ岳(越後シリーズの3弾目、三山縦走時に印象に残った荒沢岳と平ヶ岳に登るつもり)の(参加:佐藤 川名 本間 高橋)荒沢岳(竹中(荒沢岳) 遠藤(平ヶ岳)) 8月9日 浦佐よりバスで銀山平へ。伝の助小屋泊ま

り。10日 荒沢岳 前グラの長いクサリとハシゴは本邦随一(竹中) 暑さは去年程ではないが、前グラから先がきつく結構バテタ(本間) 頂上360度展望きき、天気もよく、周囲の山との位置関係がはつきりした(高橋) 11日 平ヶ岳百名山のせいか登山者が多い。山頂付近広々として気持ちよし(本間) 念願の平ヶ岳を好天に恵まれて(遠藤)

今回は三井さんが北海道の山でケガし不参加、竹中さんが2日目の朝ギックリ腰で平ヶ岳を断念と色々ありましたが、三井さんから来々4弾目のプランが出されております。巻機山・浅草岳・守門岳・会津朝日岳等、いずれも1500m以上で高山植物にも恵まれております。

キリマンジャロ・トレーニング

佐藤 富士山 8月2、4日 単独行 須走口から登頂、富士宮口山頂小屋にて遠藤、小島、蛭川さんの奥さんの3人と合流、宿泊
遠藤・小島 富士山 8月3、4日

小島 金時山 8月16日 登り下り130分の特レーニング

北岳バットレス・トレーニング

竹中 日和田山 8月1日 久しぶりの岩の感觸
中川・金子・山田氏と。山田さんのトップ
金子 氷川屏風岩 8月17日 前神さんと
その他

高橋 8月9日 坂戸山 六日町 来年の大河ドラマ「天地人」の舞台

金子 8月11日 西穂高 新穂高からケーブルで
頂上往復 13日 乗鞍 豊平から頂上往復
14日 北八ヶ岳・丸山 表草峠から頂上往復

9月16日

「出席者」石井 山崎 佐雑 三井 遠藤 蛭川
小島 西牟田 本間(記録)

山行報告

佐雑 9月10日 富士山 富士宮口より日帰り。
下山は御殿場口から 宝永山、第一火口經由。宝
永山のおあたりは素晴らしいところだった

蛭川 8月 鞍岳 今夏、体調こわし、そのリカバ
リーに行った

本間 8月27、28日 北岳 「北岳道運計画」の
先発を仲田さんと。白根御池小屋から八本歯經由
で頂上へと考えたが雨と落岩で八本歯取り付き
手前より引き返す。雨が激しくなり道路封鎖が懸
念され、小屋の管理人の勧めで夕方下山。結局道
路封鎖のため本隊も入山できず。

10月20日

「出席者」石井 山崎 三井 高橋 竹中 高崎俊

金子 本間(記録)

話題

皆さんに、キリマン組は今日来るのか、帰りに寄
るんじゃないかと言われまして、今日は今日でも今
晩遅いので参加は無理でしょうと申し上げました
が、話題は一頻りこれになりました。怪我はなかつ
たか、全員登ったかとかいろいろ話ができましたが、
70歳プラス・マイナスのメンバーがヘッドランプ
を付けて、1200m登り1700m下りとなれば、
無事に帰ってくれば成功でねえの、ということにな
りました。イヤ、お疲れ様でした。話は来月のこ
の会でじっくりとお聞きすることで。竹中さんが、
伊万里の田形さんを訪ね談話された由。隣人曰く
「行ってみたいけど遠い、山が無い」とのこと。遠
いは兎に角、山は有りそうです。田形さん、高いの
は深田さんにお任せして、低くてイイ山を紹介され
ては如何。ドクター高橋が新分野を開拓。プレート
テクトニクス理論による丹沢の成り立ちを紹介。5
00万年位昔、はるか南の海底火山がフィリピン海
プレートに載って日本に衝突した結果丹沢が出来
たのだそつな。静岡糸魚川構造線もその結果でしよ
うか？ 富士山学の佐雑さん、岩石に詳しい山崎さ
んと面白くなりそうです。滝谷は岩がボロボロでも
う昔のように登れないとか、利尻岳も頂上付近は
崩れが顕著でした。この機会に岩を知るのもいいの
では。

山行報告

高橋 9月14日 白馬山麓植物園をみた

9月30日 谷川岳山麓を歩く

10月8日 石垣山 入生田の「生命の星博物館
を」見た後先生について登る

竹中 9月20日 軽井沢 白糸の滝 鬼押し出し
長沢ゼミ同期の旅行で散策、広島から村上さんも
参加

10月10日 伊万里へ 田形さんの案内で「腰
岳」(478m)へ、日の出を待つも雲が一部出
て残念。その後臼杵へ。

高崎 10月11日 表草峠(往復) 白駒池 紅葉に
は少し早かった。

金子 10月4日 多摩川50キロ(羽村ガス橋)

職場のメンバー9名と

10月18日 会津 田代山(湯西川温泉より往
復) 妻と。紅葉真っ盛り。

山行予定

三井 11月16日頃 丹沢 表尾根へ 大倉尾根
3ヶ月振りの山です。

高橋 10月21日 金勝山、官ノ倉山 クラスメー
トと。2000、4000mの低い山

竹中 10月27日 西丹沢・大室山へ 昼から会メ
ンバーと。

金子 11月2日 香港の山 国連環境計画の写真
展開催

本間 11月7日 高尾山

平成20年度会費納入のお願い

平成20年度の会費納入をお願い致します。納入状況等に関するお問合せがありましたら会計幹事までEメール/電話にてお問合せ下さい。

会費納入先銀行口座

- (1) 銀行名 三菱東京UFJ銀行
- (2) 口座名 針葉樹会
- (3) 口座番号 普通口座 4825647
- (4) 振込時「摘要欄」にお名前(卒年次)を「ミヤシタ(S57)」等記入下さい。

会費額 卒業年次によって左記のようになっていきます。

- 昭29年以前の卒業(昭29を含む) 免除
- 昭30～42年の卒業 4000円
- 昭43～62年の卒業 6000円
- 昭63年以降の卒業 5000円

幹事連絡先

宮下 克彦(昭57卒)
E Mail Kat.Miyashita@mitsui-sted.com
電話(会社) 03 55444 6925
Fax(会社) 03 55444 6483
(三井物産スチール・第一部門造船鋼材部)

今回は予定より一カ月の発行遅れとなりました。私のキリマンジャロ登山やら編集幹事のPC障害やらで遅れました。寄稿を急いで頂いた皆さんにお詫びします。

しかし今号も会員の皆様のご協力でも多彩な内容で発行できることになりました。中村さんの終戦の頃の貴重な寄稿から始まり、塩川さん市川さんのカリフォルニア、コロラドの山の話、田形さんのアジア、竹中さん遠藤さん山田さんの国内の山々、更に安島さんのキックボクシングまで、皆さんの気持ちが伝わります。

8月開設の一橋山岳会HPは中村さん金子さんの頑張りで内容が充実してきました。会報の中でも紹介されていますが、会報とHPを相乗的によくしていきたいと思しますので会員のご参加をお願いします。(小島)

安島さん、山田さんの原稿が傑作で、感心させられました。日頃、原稿を見るのを商売にしていますが、こういう原稿をもらって嬉しくなります。一

方、パソコンはウィンドウズXPを使っていますが、立て続けにサービスのにもハード的にも様々なトラブルが発生して頭にきました。マイクロソフト社のやり方もかねがね心良く思っていなかったし、対ウイルス対策のことも考え、近いうちにマックに乗り換えようかと……。だからといって、自分の能力がアップするわけじゃありません。(井草)

R大学山岳部OGの友人が会報幹事をしており、問い合わせを受けたため、HPを通じて会報を読んでもらったところ、内容が充実している、書き手がたくさんいてすごいと絶賛してくれました。年代も住む場所も生き方も多岐にわたる層の厚さ、その違いを超えて出会うの場があることが、この会の真骨頂ではないかと感じます。最近、山に登っていないなどの理由からアウトサイダー(?)を自認する方にもぜひ近況をお知らせいただきたいです。今後ともよろしく願っています。(川名)